

一ノ坪遺跡発掘調査報告書

県営塩山熊野団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

1997.3

山梨県教育委員会
山梨県土木部

序

一ノ坪遺跡は山梨県の北東部塩山市熊野地区にあります。付近には昭和53年に発掘調査いたしました西田遺跡があります。西田遺跡は古墳時代に属しますが、本遺跡は平安時代の終わりごろに位置します。平安時代の終わりごろと言いますと、本県では甲斐源氏の勃興期に当たり、武田信義、安田義定の活躍は「吾妻鏡」でも知られるところあります。塩山市には安田義定開基の放光寺がありますが、遺跡とは4キロほど離れております。遺跡に近接しては熊野神社があります。この神社の創建は不明ですが、大同2年に再建されたと伝えられておりますので、遺跡が営まれた時期には神社も存在したということになります。

この古代から中世へと転換する時期は、本県では平安時代盛んに作られました「甲斐型土器」がその精彩を失い、中世的な土師質土器へと転換する時期であり、また灰釉陶器が急激に失われ、中国製白磁等の輸入が増大した時期でもあります。

平家物語などの活躍の歴史絵巻きにややもすると目を奪われがちですが、歴史の大きな転換期には、一ノ坪遺跡に見られように地方農民層の経済の中にも何やら変化が現れているようあります。歴史の転換期の一資料として、本報告書を活用して頂ければ幸いります。

なお、調査にあたりまして、種々ご協力をいただきました関係各機関、また直接発掘調査に当たられた方々に厚く御礼申し上げます。

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚 初重

例　　言

- 1 本書は県営塙山熊野団地建設に伴う一ノ坪遺跡発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は平成7年10月23日より12月23日までと平成8年4月15日から5月25日まで、山梨県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 本書の編集は小野正文が担当し、第2章、第6章第2節を熊谷栄二、他を小野が執筆した。
- 4 第8章の土壤分析などはパリノサーベイ株式会社に委託した。

索　　引

項目	ページ	項目	ページ
か 灰釉陶器	4・5	あ 網代	11
か 甲斐型土器	8	う 上ノ山式土器	11
か 錄	5	お 押型文土器	11
か 釜	5・6・7・8・9	き 木島式土器	10・11
こ 高台坏	8	し 下吉井式土器	11
す 須恵器	5・8	そ 曽利式土器	11
ち 柱状高台	6	は 判ノ木山西類型	10・11
つ 坏	5・6・7	も 脳殻 b 式土器	9
て 鉄製品	4・5・9	も 脳殻 c 式土器	9
て 鉄錆	5	い 石皿	12
と 砥石	5・8	い 石錆	13
と 刀子	9	い 石匙	13
は 白磁	5・8	す 磨石	12
は 土師器	4	て 底部穿孔埋甕	10
		ゆ 有孔鍔付土器	10
		れ 碓器	12

正 誤 表

誤

正

例言4行目 第6章第2節 ⇒ 第7章第2節

11ページ1行目 説明しあく ⇒ 説明しておく

報告書概要

著者名 熊谷英二 ⇒ 熊谷栄二

調査期間 1985年... ⇒ 1995年

1986年... ⇒ 1996年

目 次

序
目 次
例 言
索 引
挿図目次
図版目次

目 次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査の経過	1
第2節 調査の組織	1
第2章 遺跡の概況	2
第1節 遺跡の位置と地理的環境	2
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境	2
第3章 平安時代の遺構	4
第1節 住居址	4
第2節 土 坑	5
第3節 溝	6
第4節 その他の遺構	6
第4章 平安時代の出土遺物	7
第1節 平安時代の土器など	7
第2節 平安時代の鉄製品など	8
第5章 縄文時代の遺構	9
第1節 住居址	9
第2節 土 坑	9
第6章 縄文時代の遺構と遺物	10
第1節 遺構出土縄文土器	10
第2節 その他の縄文土器	11
第3節 石器類	12
第7章 まとめ	13
第1節 平安時代末の土器様相	13
第2節 11世紀から12世紀の日宗貿易について	16
第3節 底部穿孔埋甕について	18
第4節 一ノ坪遺跡の性格について	20
第8章 一ノ坪遺跡の自然科学分析報告	21

挿図目次

- | | |
|----------------------------|--------------------------------|
| 第1図 一ノ坪遺跡位置図 | 第18図 土坑実測図(1) |
| 第2図 一ノ坪遺跡全体図 | 第19図 土坑実測図(2) |
| 第3図 SD01・02セクション図 | 第20図 土坑実測図(3) |
| 第4図 SD03セクション図 | 第21図 土坑実測図(4) |
| 第5図 SD04・05セクション図 | 第22図 歴史時代遺物実測図(1) |
| 第6図 SB01・K-20埋甕出土状況実
測図 | 第23図 歴史時代遺物実測図(2) |
| 第7図 SB02実測図 | 第24図 歴史時代遺物実測図(3) |
| 第8図 SB03実測図 | 第25図 鉄製品実測図 |
| 第9図 SB04実測図 | 第26図 縄文時代土器拓本図(1) |
| 第10図 SB05実測図 | 第27図 縄文時代土器拓本図(2) |
| 第11図 SB06実測図 | 第28図 縄文時代土器拓本図(3) |
| 第12図 SB07実測図 | 第29図 縄文時代土器実測図 |
| 第13図 SB08実測図 | 第30図 縄文時代土器拓本図(4) |
| 第14図 SB09実測図 | 第31図 縄文時代土器拓本図(5)・石器
実測図(1) |
| 第15図 SP12実測図 | 第32図 石器実測図(2) |
| 第16図 SP16実測図 | 第33図 石器実測図(3) |
| 第17図 SP18実測図 | |

図版目次

- | | |
|------|------------------|
| 図版 1 | 一ノ坪遺跡全体空中写真 |
| 図版 2 | 住居址 |
| 図版 3 | 土坑 |
| 図版 4 | 土坑 |
| 図版 5 | 溝 |
| 図版 6 | 出土遺物、土師器、灰釉陶器、白磁 |
| 図版 7 | 出土遺物、土師器、灰釉陶器、白磁 |
| 図版 8 | 鉄製品 |
| 図版 9 | 縄文土器 |
| 図版10 | 縄文土器・石器 |

第1章 調査の経緯

第1節 調査の経過

塩山市熊野27番地ほかに県営住宅塩山熊野団地が建設されることになり、県埋蔵文化財センターが平成7年10月17日より、工事工程と調整を図りながら、2ヶ年に分けて発掘調査することになった。

1995年10月19日 発掘調査届出提出

10月23日 発掘調査開始

12月23日 発掘調査終了

12月17日 遺物発見届け提出

1月10日 基礎的整理作業開始

3月31日 整理作業終了

1996年4月15日 発掘調査届出提出

4月15日 発掘調査開始

5月25日 発掘調査終了

5月19日 遺物発見届け提出

1997年1月10日 整理報告作業開始

3月31日 整理報告作業終了

第2節 調査の組織

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者 小野正文、小泉敏（平成7年度）、熊谷栄二（平成8年度）

調査員 富永小枝（平成8年度）

平成7年度外務省長期青年紹聘事業研修生

チム・ソカンダラ（カンボジア）

作業員および整理員

竹内孝治郎・寺内みち子・福永千賀代・古屋茂美・藤原美代子・小河いつゑ・名取婦美子・戸田ひろ・山崎靖子・黒瀬信子・林周子・保坂真澄・中川美千子・飯田みづほ・赤岡敦・雨宮久美子・雨宮千尋・山下好・栗原礼子・萩原理江子・三好美智・大塚敦子・向山ちか子・佐藤正美・古屋しづ・富永小枝・小野美よし・古屋みゆき・若月洋子・岩瀬直美・沢登淳子・深沢さつき・竹井加奈子・深沢茂子・志村薰・萩原光代・矢崎米子・向井袈裟春・小林よ志子・平美与枝・星野松子・雨宮滋美・渡辺徳子・小沢恵津子・安藤純子・佐野博基・青柳清・清水貞子・浅川一茂・清水澄代・清水島子・伊藤杉子・壺屋てる子・市川祥子・大久保発子・金杉玲子・渡辺金重・市村誠・石原恵・小林裕子・八巻久子・平嶋弘子・平嶋純一・石原由美子・久保田明義・望月芳郎・越石力・長坂清・内藤安雄・菅沼芳治・出月遊鬼子・長田可視・出月満す江・中込よしひ・深沢聰美・雨宮加代子・篠原勝男・渡辺かおり・折居きく・秋山とみ・齊藤直江・齊藤利男

第2章 遺跡の概況

第1節 遺跡の位置と地理的環境

一ノ坪遺跡は、山梨県塩山市熊野27他に所在する。塩山市は山梨県の中央部、甲府盆地の北東部に位置し、北は埼玉県秩父郡大滝村、東は北都留郡丹波山村・小菅村と大月市に、南は東山梨郡大和村・勝沼町、西は山梨市・東山梨郡牧丘町・三富村と接する。市域の約80%は標高600m以上の山林原野で、北部から東部にかけては秩父山地の唐松山・笠取山・大菩薩嶺などをはじめとする、標高2,000m級以上の急峻な山岳地帯を形成している。またこれらの深い山岳地帯を源として、市域西方を笛吹川、ほぼ中央部を重川が東西に流れ、これらの河川によって下楠木・藤木、下栗生野・下萩原付近では河岸段丘の発達がみられる。市街地はこの両川によって形成された扇状地上に位置し、標高350m~600mの平地に集積している。その市中心部を南西部から北上し、南東部にかけて弧を描くようにJR中央本線が走り、北東から南西にかけては国道411号線(旧青梅街道)が縱断している。

産業は、戦前は養蚕・稻作が盛んであったが、戦後その多くが果樹栽培に切り替えられ昭和60年頃には耕地の70%余りで、ブドウ・桃・スモモなどの栽培が行われていた。なお本調査区も約80%がブドウ・桃園であった。

遺跡の所在する熊野は、塩山市の南西部、市街地の南部、南西流する重川の右岸に位置する扇状地上にあり、南部で勝沼町と接している。地名は、熊野権現が鎮座することに由来するが、古くは応仁元年(1467)12月9日の同社棟札銘にみえるように、御座郷横井村と呼んだという(甲斐国志)。

昭和52年に塩山警察署建設に伴う発掘調査の結果、古墳時代前期五傾期の方形周溝墓や住居跡群が検出された西田遺跡の存在が明らかにされており、一ノ坪遺跡は、その北側400mの地で、扇状地内の単独丘陵塩山(古今和歌集所載の「しほのやま差出の磯にすむ千鳥君か御代をは八千代とぞ鳴く」で有名、塩山の由来)付近に源を発する、重川の支流塩川と熊野の西部を南北にかかめる塩山バイパスが交差する東側に位置する河岸段丘で、標高は371mである。なお、遺跡内には三宮司(さんぐうじ)の小祠が存在する。

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

塩山市南西部は重川と笛吹川による複合扇状地を形成しているが、市域に於ける遺跡のほとんどはこの地域に集中している。特に重川に谷部から扇尖部に至る約3kmに30余りの遺跡が、また本遺跡を中心とした扇端部には約15、市に隣接する山梨市や勝沼町を含めると約60余りの遺跡が確認されている。市域に於ける遺跡は大半が縄文時代であり特に縄文中期の遺跡数は他の縄文時代の遺跡数を圧倒している。奈良・平安時代の遺跡は本遺跡以東、特に山梨市側に多く存在している。

縄文時代では、前期の住居跡7軒とともにこの地域では類例のない有脚土偶など6点や多量の水晶原石などが出土した獅子之前遺跡、中期前半の住居跡等が検出された安道寺遺跡、底部欠損埋甕と底部穿孔埋甕が数点出土した町田遺跡、藤内式期の住居跡から多量の土器を出土した重郎原遺跡、イノシシ装飾付釣手土器が出土した北原遺跡、藤内式期の土坑埋設土器を多量に出土した柳田遺跡、中期後半の曾利式期の土坑群や配石造構が検出された牛奥遺跡などがある。また殿林遺跡から出土した高さ73cmの深鉢形土器は技巧的にも優れた大型品で国の重要文化財に指定されている。

弥生時代は安道寺遺跡・米ノ原遺跡・東田遺跡など、わずかに限られた遺跡のみで確認されている程度で、髪切塚や竹森・下萩原の浅間塚など数カ所の土盛りを持つ塚は知られているが、今のところ明確に古墳と確定できるものは確認されていない。

古墳時代前期の集落跡としては県内最大級を誇る西田遺跡で方形周溝墓が数基検出されており、この地域



第1図 一ノ坪遺跡位置図

周辺の遺跡

- 1 西畠A遺跡、2 神之木遺跡、3 旗板遺跡、4 於曾屋敷、5 苗田天神社遺跡、6 宇賀屋敷、7 池田氏屋敷、
 8 宇賀屋敷遺跡、9 林際遺跡、10 田辺氏屋敷、11 天神原遺跡、12 受地遺跡、13 正泉B遺跡、14 正泉A遺跡、
 15 横堀遺跡、16 池田遺跡、17 横井・大木戸遺跡、18 石滑B遺跡、19 石滑A遺跡、20 熊野八反田遺跡、21 下整田遺跡、22 熊野前田遺跡、23 中道遺跡、24 熊野神社遺跡、25 梶畠A遺跡、26 梶畠B遺跡、27 下於曾八反田遺跡、
 28 清水尻遺跡、29 宮之前遺跡、30 稲荷林遺跡、31 知光田遺跡、32 道替遺跡、33 清水田遺跡、34 上塙後遺跡、
 35 菓師平遺跡、36 十王前遺跡、37 扇田C遺跡、38 町田遺跡、39 扇田B遺跡、40 向原遺跡、41 村北遺跡、
 42 西田遺跡、43 東田遺跡、44 芦原田遺跡、45 西堀遺跡、46 住蓮木平遺跡

は古墳の築造の少ない方形周溝墓の伝統を残した地域であったと考えられている。

武田信虎・信玄の代に盛んに金の採鉱が行われた上萩原の黒川金山は、伝説的には平安時代にすでに砂金の採取が始まるとされている。昭和46年に調査された原の京遺跡で奈良時代末から平安時代初頭の豊穴住居跡とともに発見された遺構は、このことから鍛冶遺構と推定され、市の文化財となっている。また塙山市には恵林寺・向嶽寺・菅田天神社に代表される、武田氏との強い結びつきをもつ寺社が数多く存在し、武田氏に関連する遺跡が市域に分布している。

第3章 平安時代の遺構

第1節 住居址

S B02 平面形は長方形をなし、長径410cm、短径345cm、深さ10cmを測る。確認面と床面との距離がほとんどの住居址で、遺物の存在は危ぶまれたが、灰釉陶器 1点が出土している。カマドの痕跡はまったく認められない。重複しているSP09は住居址確認面ではまったく検出されなかたので、より古いものと思われる。

S B03 平面形は長方形をなし、長径410cm、短径300cm、深さ10cmを測る。溝 S D01と重複関係にあり、溝の埋設後東北隅にカマドを構築している。カマドは当地方の平安時代末に見られる隅に石組みを持つものである。灰釉陶器、土師器、鉄製品の出土が認められた。床面を剥いで柱穴の検出をしたが、柱穴の存在は確認できなかった。

S B04 平面形は長方形をなし、長径430cm、短径320cm、深さ35cmを測る。床面がフ拉斯コの底状を示し、柱穴が壁際に検出されたので、一般的の住居とは性格の異なるものと思われる。こうしたフ拉斯コの底状の床面をなすのは、SB05、SP16も同様である。出土遺物は乏しく、縄文時代のものが大半を占めるが、わずかに鉄製品の出土が認められた。

S B05 平面形は方形をなし、長径270cm、短径260cm、深さ30cmを測る。S B04、SP16と同様なフ拉斯コの底状の床面をなし、出土遺物も極めて少ない。柱穴は周囲に 6穴認められ、西側に並ぶ 3穴の柱穴も含めれば、小豎穴を持った獨立柱建物址の可能性も否定できない。また、この遺構の北東側を S D03、S D02の 2条の溝が南流することから、この溝との関連も考えられる。

S B06 平面形は方形をなし、長径395cm、短径360cm、深さ40cmを測る。S D01の分岐する溝と重複し、溝の覆土である黒色の堆積土が、住居址のプランの中には見とめられなかったので、溝より住居址は新しいものと考えた。カマドは東北隅にカマドを構築している。カマド付近の床面には焼土と炭化物の堆積が認めら、平底の釜（鍋のほうが適切かもしれない）、釜、壺の出土が認められた。

S B07 平面形は長方形をなし、長径480cm、短径410cm、深さ30cmを測る。SD07埋没後に構築された住居址である。北東隅にカマドが構築されていたが、その下部に SP29の深さ27cmを測る土坑が存在した。カマドの土層が攪乱を受けていないことから、より古い土坑と思われる。柱穴は壁際に 3穴、他に小土坑が 2個認められた。出土遺物は、釜 2点、壺 1点、灰釉陶器 2点と鉄製品 2点の出土が、そのうち 1点は刀子である。

S B08 形状は方形をなす。長径385cm、短径365cm、深さ15cmを測る。東南隅にカマドの痕跡が認められたが、床面中央部にも焼土の広がりがあった。小穴は検出されたが、柱穴と確定できるものはなかった。出土遺物は比較的豊富で、土師壺 3点、白磁 1点、鎌 1点を含む鉄製品 3点、砥石 1点が出土している。白磁は蘿崎市中田小学校遺跡の14号住居址出土のものと類似している。

第2節 土 坑

- S P 03** 円形の深さ20cmの浅い土坑であったが、中から鉄鎌3点が出土している。鉄鎌は雁股鎌2点と、燕鎌1点の計3点が出土している。鉄鎌の形状から戦闘用のものというより、祭祀、儀式用のものではないかと想像される。他に土師器の壺の底が出土している。
- S P 05** 形状が不整形をなすが、人頭大の石を直線的に並べており、中から焼土と骨片の出土があるほか、柱状高台の壺、壺、釜の出土がある特殊な土坑である。出土遺物からおおむね一ノ坪遺跡の平安末の集落と同時期のものと思われる。
- S P 08** S D 03の終点、S D 02の起点に位置する方形の浅い土坑である。中央部にやや深いピットを持ち、2個の柱穴らしきピットをもつが確定できない。溝と関係することから、作業用の施設が想定される。
- S P 09** S B 02と重複する方形の土坑である。壁際に柱穴と思われるピットを有している。
- S P 11B** S P 08と同じような性格の遺構と思われるが、覆土がほとんどなく出土遺物もない。S D 02と重複関係をもち、S D 02がS P 02を切っているように観察された。
- S P 12** 不整形の土坑である。はじめ楕円形の土坑と想定され、調査を進めるなかで、下部は動物によって相当なカクランを受け、さらに洪水堆積の砂層が認められ、本来の形状を失ったものと思われる。土坑の北側隅で、灰釉陶器の高台壺⁽¹³⁾、須恵器の壺⁽¹⁵⁾、底部の異様に厚い甕⁽¹⁴⁾と思われる底部の出土がある。
- S P 15** ほぼ円形をなす135×125cm、深さ24cmの土坑で、特に出土遺物は認められなかった。
- S P 16** 平面形は円形をなし、29×295cm、深さ55cmの床面がフラスコの底のような形状をしており、規模から住居址かとも思われたが、柱穴等は検出されず、土坑として取り扱った。特に時代を特定する出土遺物には恵まれなかったが、砥石1点が出土している。このことから、何らかの作業に関われる施設と思われる。
- なお、時期の確定できない土坑は一覧表に形状が記してある。

一覧表

図版	番号	平面形	長径 cm	短径 cm	深さ cm	出 土 遺 物
18	S P 01	楕円形	210	110	66	柱状高台
2	S P 02	楕円形			26	
18	S P 03	楕円形	125	115	20	
18	S P 04	楕円形	130	95	18	
18	S P 05	不整形	32	210	25	釜、壺
18	S P 06	不整形	215	165	76	
2	S P 07	(楕円形)			20	
18	S P 08	長方形	240	215	33	
18	S P 09	長方形	275	190	40	釜、壺
18	S P 10	不整形	505	295	91	釜
18	S P 11	円 形	90	90		柱状高台
2	S P 11B	長方形	320	210	17	
2	S P 12	(不整形)	(320)	305	75	
2	S P 13A	(不整形)		(95)		
2	S P 13B	(不整形)		(95)	67	壺、釜
2	S P 14	(不整形)		(100)	70	壺
19	S P 15	不整形	135	125	24	
2	S P 16	円 形	290	295	55	砥石
2	S P 17	(不整形)	(245)	140	51	壺
2	S P 18	楕円形	360	285	130	
19	S P 19	円 形	290	280	57	網文土器

2	S P20	(橢円形)	170	79	縄文土器
19	S P21	(橢円形)		115	74
19	S P22	(円形)	75	7	25
2	S P23	(不整形)	135		12 坪、釜
19	S P24	不整形	200	115	65 縄文
19	S P25	円形	130	9	55 縄文、平安の坪
19	S P26	不整形	300	265	16 縄文
19	S P27	円形	115	110	110
19	S P28	円形	115	100	45
19	S P29	不整形	250	100	27 坪
2	S P30	不整形	175	105	35 坪
19	S P31	不整形	160	95	60
19	S P32	円形	115	95	60
6	K-20	不整形	190	110	22 縄文

第3節 溝

S D01 H—3 グリットからF—3 グリットへ続く、幅100cm、深さ45cmをはかるが、H—3 グリットのS B04の南側付近で浅くなり、流路が不明となる。S B03のカマドはこの溝埋没後に構築され、西側の壁も同様である。F—3 グリットに十字に交わる分岐点があり、S B05は住居址の東西セクション図にS D01の黒色埋没土が確認されなかったので、この住居址はS D01より新しいものと考えられる。

S D02 G—9 グリットからI—4 グリットへと南流する水路で、上流部S D05に切られ、浅くなるため流路の端めの部分は不明である。I—5 グリットの杭のところでやや幅を広くし、何らかの施設があったと思われる。この溝はS B05をかすめるように走っており、作業施設であるS B05との関係が伺われる。

S D03 I—5 グリットのS P08を終末として、I—19 グリットまでほぼ真北に伸びる水路である。途中I—7、8 グリットのS D05と交差する部分が一段と深く、I—19 グリット部分にも一段と深い部分があり、水溜状をなしている。通常水路の流路には底に砂の堆積が見られるものであるが、一ノ坪遺跡の溝にはいずれも砂の堆積はみとめられなかった。この溝がほぼ真北に伸びることと地名の一ノ坪との関係があるとすれば、条里線にそった溝ということができよう。

S D04 I—5 グリットから始まり、SP11Bの部分で消えてしまう比較的短い溝であるが、堆積土の様相がS D05とは異なるので、別名を記した。S D03の終末路となるのか、または新たな溝なのかは不明である。

S D05 F—7 グリットからJ—9 グリットに流れ、遺跡をほぼ東西に横断する溝で、幅100cm、深さ47cm のV字状をなしている。出土遺物はほとんどなく、S D02、03を切っていることから、これらの溝より新しいものであることは、あきらかである。K—7、8 グリットには両側にピットがあり、溝と関係した施設と考えられる。またこの付近に焼土が堆積していたが、土層観察より、S D05に直接関係のない焼土であると判断した。

第4節 その他の遺構

時期が確定しないが、縄文時代とは異なる遺構がいくつか存在している。柱穴と思われるピット群はS B04、05付近に集中して見られたが、掘立柱建物として連続するするものは、皆無であった。ただ住居址のところでもふれたが、S B04、05の付近にあるものは、これらの竪穴に付属するものであろう。

またグリットに見られた隅丸長方形の土坑は、他の遺物を伴出した住居址や土坑と覆土がことなり、平安時代の同時期のものとは考えられない。掘立柱建物の柱穴のような連続性をもたないので、柱穴ではない。

第4章 平安時代の出土遺物

第1節 平安時代の土器など

平安時代の出土遺物については、下表のように観察結果を記述した。土器は土師質土器へと転換期のものであるが、ここではとりあえず、土師器としておく。

土器一覧表

辨団	番号	出土地	種類	器形	口径 cm	底径 cm	高さ cm	備考
22	1	SB-02	灰陶陶器	壺	13.1			
~	2	SB-02	土師器	釜	35.6			
~	3	SB-03	土師器	壺	14.3	6.3	3.85	
~	4	SB-03	土師器	壺	13.3	6.9	4.3	
~	5	SB-03	土師器	壺	13.3	6.7	5.05	
~	6	SB-03	土師器	壺	15.0	4.4		
~	7	SB-03	土師器	壺		6.7		
~	8	SB-03	土師器	壺		6.4		
~	9	SB-03	土師器	壺		6.4		
~	10	SB-03	土師器	壺	14.7			
~	11	SB-03	土師器	壺	15.4			
~	12	SB-03	土師器	壺	9.0	4.7	3.0	
~	13	SB-03	土師器	壺	9.5	4.3	2.95	
~	14	SB-03	土師器	壺	8.9	4.5	2.5	
~	15	SB-03	灰陶陶器	高台壺		6.1		
~	16	SB-06	土師器			4.3		
~	17	SB-06	土師器			4.5		
~	18	SB-06	土師器			6.6		
~	19	SB-06	土師器	釜	37			
~	20	SB-06	土師器	釜	22	12	10.7	
~	21	SB-06	土師器	釜				
~	22	SB-06	土師器	不明				
23	1	SB-07	灰陶陶器	高台壺	16.0	7.6	6.5	
~	2	SB-07	灰陶陶器	高台壺		7.5		
~	3	SB-07	灰陶陶器	高台壺		6.8		
~	4	SB-07	土師器	不明				
~	5	SB-07	土師器	釜	26.6			
~	6	SB-07	土師器	釜	32.6			
~	7	SB-08	白 粗	瓶	16.0			
~	8	SB-08	土師器	壺	12.5	5.9	3.8	
~	9	SB-08	土師器	壺	9.1	5.5	2.0	
~	10	SB-08	土師器	壺	8.6	4.0	2.6	
~	11	SB-08	土師器	壺		6.8		
~	12	SP-03	土師器	不明		9.8		
~	13	SP-12	灰陶陶器	高台壺		7.5		
~	14	SP-12	土師器			8.4		
~	15	SP-12	須恵器	釜				

24	1	S P-05	土師器		4.8		
*	2	S P-05	土師器		5.5		
*	3	S P-05	土師器		5.3		
*	4	S P-05	土師器		5.9		
*	5	S P-05	土師器	釜	37.4		
*	6	S P-05	土師器	釜	28.5		
*	7	S P-09	土師器				
*	8	S P-13	土師器				
*	9	S P-16	砾石				
*	10	S D-01	土師器		10.0	1.85	4.0
*	11	S D-03	土師器		9.8	2.1	
*	12	S D-05	土師器			5.6	
*	13	S D-05	土師器			4.2	
*	14	S P-27	土師器			7.4	
*	15	G-10	土師器			6.6	
*	16	H-10	土師器		10.5	4.3	3.1
*	17	G-11			15.4		
*	18	H-4	土師器			6.2	
*	19	I-6	土師器				
*	20	M-18	土師器		15.2	5.2	5.3
	21	K-17	土師器		12.9		
	22	H-12	土師器	釜	25.5		

第2節 平安時代の鉄製品など

平安時代の鉄製品などについては、下表にまとめた。

博団	番号	出土地	名称	縦 cm	横 cm	厚さ cm	重さ g	備考
25	1	S B-03	不明	1.90	2.0	1.73	7	
*	2	S B-03	不明	2.54	4.89	0.40	8	
*	3	S B-03	不明	2.59	4.04	1.42	8	
*	4	S B-04	不明	5.22	2.74	1.47	16	
*	5	S B-04	不明	2.15	3.70	1.09	11	
*	6	S B-06	不明	1.90	5.60	0.61	6	
*	7	S B-07	刀子	1.15	7.04	0.54	5	
*	8	S B-07	不明	3.76	4.92	1.70	31	
*	9	S B-08	不明	4.43	4.29	2.32	57	
*	10	S B-08	不明	3.67	6.23	2.03	37	
*	11	S B-08	鎌	4.55	14.70	1.39	71	
*	12	S P-03	鉄鎌	19.90	5.10	1.29	52	
*	13	S P-03	鉄鎌	8.60	4.09	1.34	33	
*	14	S P-03	鉄鎌	14.45	3.05	1.72	42	
*	16	S D-01	不明	1.65	3.50	1.15	8	
*	17	I-3	不明	2.50	8.60	0.76	17	
*	18	H-5	不明	2.35	3.71	0.82	7	
*	19	I-4	不明	7.20	1.03	0.74	10	
*	20	F-3	不明	8.43	3.60	0.90	5	

第5章 繩文時代の遺構

第1節 住居址

S B 01 方形石組炉を中心柱穴と思われるピット群を確認したので、繩文時代中期の住居址の痕跡と判断した。石組炉の中には焼土や灰は確認されなかったが、有孔鋲付土器が正位の状態で埋設されていた。周囲には繩文中期の土器片が数点散在しており、中に台付き壺の底部と思われる部分の出土も認められた。

S B 09 平面形は円形をなし、S P 18とよく似た形状、時期を示すものであるが、住居址と認識したが、いわゆる小竪穴状遺構である。中央部がやや窪んでいたが、焼土は皆無であり炉址と確定するにいたらなかった。出土遺物は比較的豊富で、石器などの出土が多い。土器は諸磯 b 式から c 式のものが見られ、遺構の時期は諸磯 c 式期としておく。

第2節 土坑

S P 10 G—3グリットに所在し、平面形は不整形をなしており、深さ91cmを測り、土坑としては規模の大きいものである。土層の判別が困難で当初の確認平面形とは違った様相をなすようになったものである。出土遺物は繩文前期諸磯式 b 式から c 式が見られ、b 式が主体となっている。中には焼成粘土塊が見られる。繩文前期のものとしては、類例の少ないものである。

S P 18 G—3からG—2グリットに所在する土坑で、確認面とほとんど変わらない土層のため、平安期の遺構の調査終了後試験的にトレンチを入れて確認した遺構である。平面形は円形で、いわゆる小竪穴状遺構と呼ばれるものである。柱穴、炉址ともに認められなかつた。出土遺物は繩文時代前期の諸磯 b 式土器を中心に見られた。形状の復元できる浅鉢、深鉢（第29図1、2）の出土もあり、遺構の時期としては諸磯 b 式期である。

S P 19 L—18、19グリットにある円形の土坑で、石鎚、石匙の出土があるほか、土師器底部の一部の出土があるが、堆積土から繩文時代の土坑と判断した。

S P 20、21 K—19、18グリットにある土坑で、横円形の長軸にそって重複しているので、個々の計測値は不明であるが、170×115cm、深さ74cmの土坑である。黒色をなす覆土より繩文時代の土坑であることが、発掘時より判明していた。出土遺物は石鎚2点がある。

S P 25 K—18グリットにある円形の土坑で、中から繩文早期の土器の出土がある。

S P 27 J—16グリットにある深さ27cmの土坑で、S B 07のカマドと完全に重複したものである。出土遺物は石鎚2点がある。

S P 32 L—19グリットにある円形の土坑で、下部は動物により搅乱されていた。石鎚1点の出土がある。

S P 33 L—19グリットにある不整形の土坑で、繩文前期の土器などが出土している。

K—20グリット出土の底部穿孔埋甕 この遺構は遺構面確認調査でもまったく検出できなかつたもので、あえて土坑名を付さなかつたものである。単独の屋外埋甕と思われる。

第6章 繩文時代の遺構と遺物

第1節 遺構出土の縄文土器

S B01 出土土器 (26図 1~2)

S B01の石圓炉状の石組みの中に正位の状態で(1)の有孔鉢付土器が埋設されていた。有脚の有孔鉢付土器で、頸部に人面様の把手が1個付く。(2)は蓋などの有脚の部分である。

S B09 出土土器 (28図)

(1~2)は諸磯b式土器の沈線文系土器である。(3)は有孔土器の口縁部である。(4~8)は諸磯c式土器の浮線文土器である。(9~12)は諸磯c式土器の浮線文の消失した時期のものである。(13~18)は同式の結節浮線文土器である。(19)は口縁部に刺突文を持ち沈線を縦に施すもので、織維の含有は判然としないが、判ノ木山西類型の土器であろう。(22, 23)は東海系の木島式土器に属するものであろうが、時期的には前期初頭に位置するものであろう。

S P10 出土遺物 (26図 3~29)

一ノ坪遺跡では、明確に縄文時代に属する遺構は少ない。(3~11)は第6群土器に属する諸磯b式の沈線文系土器群である。(12~14)は半截竹管様工具による沈線の始点がはっきりしたものである。(15~16)は無文に近いもの。(17~24)は単節縄文を施したもので、第5群土器に属するものである。(25~26)は無節縄文を施すものである。27は焼成粘土塊で縄文前期に属するものは類例はほとんど知られていない。(28)は第7群土器に属するものである。(29)は早期末の下吉井式に属するもので、鋸歯状の沈線に結節が見られる。

S P18 出土遺物 (27図 1~50)

柱穴と炉址を欠くが、小豎穴状の遺構で中から前期の土器が出土している。(1)は内側に屈折した口縁部を持ち、器面は細い束状の工具で縦に成形しているため、縦の筋状になっている。口縁部にアナグラ属の貝殻の背圧痕が見られる。体部には太い無節のLを施している。この縄文は(45, 46)とほぼ同様である。胎土に織維を含まないことから、前期の所産としたいが類例を知らない。(2, 3)は諸磯b式の浮線文系土器である。(2)是有孔土器である。(4~20)は諸磯b式土器の沈線文系土器である。(21~29)は沈線文のうち矢羽状に施すもので、諸磯c式に近いものである。(30~37)は単節縄文を施すものである。(38~44)は無節の縄文を施すものである。(47)は網目状撲糸文を施すものである。(48~49)は無文土器である。(50)は諸磯c式の結節浮線文土器である。

K-20グリット出土の底部穿孔埋甕 (29図 3)

口径46.7cm、底径10.7cm、高さ47.4cmを測る曾利式の大型深鉢である。口辺部文様帶は失われ、I状の沈線が断続的に巡るのみである。体部は大区画を6単位施し、そのうち3区画には波状沈線を垂下させるもので、その他の空間は太い沈線を横位に充填するものである。底部には1本超え、1本潜りの網代の痕跡が残っている。底部の穿孔の様子は揉み切り穿孔ではなく、破壊穿孔である。曾利新段階に属するものである。

図版	番号	出土地	種類	器形	口径	底径	高さ	残存率	備考
29	1	S P-18	縄文土器	深鉢	30.0			30	
*	2	S P-18	縄文土器	浅鉢	30.2	6.0	8.6	60	.
*	3	K-20	縄文土器	深鉢	42.6	10.7	47.4	100	底部穿孔埋甕

第2節 その他の縄文土器

グリット出土などその他の縄文土器については、多岐にわたるので、これを分類して説明しおく。

第1群 押型文土器 (30図1~7)

縄文早期の山形押型文土器である。破片が小さいため原体については不明だが、原体端に切削りが見られる。山形文の振幅の大きいもの(3)と他は振幅が小さく、(1)はやや丸みを帯びている。

第2群 判ノ木山西類型の土器等 (30図8~16)

A類 長野県茅野市の判ノ木山西遺跡跡の土器を標準資料とする判ノ木山西類型の土器である。織維を含み、竹管状の工具で沈線文、浅い沈線文を施文するものである。(8)は口唇裏に小さい幅の条痕を有する。(9)は表裏に条痕を有し、条痕地に竹管状工具で沈線文を縦に引き、口縁部端に刻み目を有している。この刻み目も特色の一つである。(13)は表裏に条痕を有し、口唇部に竹管内側による刻み目を施している。

B類 太い沈線文を有する土器である。(16)は口辺部文様帶の区画の部分に同じ竹管状工具で刺突文を数条施している。こうした手法は吉井1群2類土器にも見られる手法である。

C類 細い鋭い沈線文を有する土器で、類例の知られていないもの。(30図17)

D類 口唇部に刺突とつまみ状の文様を施すものである。同様な手法は東海地方の上ノ山式に見られる。(30図18)

第3群 早期末下吉井式土器 (26図29)

第4群 前期の木島系土器 (28図22、23)

第5群 縄文を有する土器 (30図19~35)

前期の諸磯b式に属すると思われる土器である。RLの単節縄文を施している。(33~35)は織維の固い縄文を施している。

第6群 沈線文を有する土器 (30図36~41)

縄文前期諸磯b式の属する沈線文土器と思われる。

第7群 沈線文上に浮線文を施す土器 (30図42~49)

縄文前期の諸磯c式に特徴的な浮線文土器である。

第8群 沈線文で区画などを描く土器 (30図50~56)

諸磯c式土器の中でも、浮線文が消失した新しい時期の土器である。(56)は底部破片の該期の特色である張り出した底部をもっている。

第9群 中期前半の土器 (31図1~3)

(2)は落沢式土器である。(3)はいわゆる勝板式に特徴的な屈折底をもつ土器である。

第10群 中期後半の土器 (31図4~10)

曾利縄文系の土器(4)は、縄文地に口縁部に連続した刺突文を施すものである。八ヶ岳地域より、甲府盆地東側の地域から関東方面に見られる。(5)は曾利式の肥厚口縁系土器である。(6~10)は曾利新式の新しい部分に属するものである。(9)は加曾利E式であろう。

第11群 後期前半の土器 (31図11、12)

堀之内1式に属するである。

第3節 石器類

石器については、下表にまとめた。このなかで、注目されるのは、花崗岩類の石皿の出土である。

残念ながら縄文時代の遺構からは出土しなかったが、県内ではほとんどが安産岩系の岩石に限られるが、花崗岩類は初例である。

石器一覧

図版	番号	出土地点	名 称	長さ	幅	厚さ	重さ	石 材	その他の
32	1	SB-09	擦 器	15.5	11.1	5.4	897	泥質ホルンフェルス	
~	2	SB-09	擦 器	8.5	9.4	2.6	227	泥質ホルンフェルス	
~	3	SB-09	擦 器	8.5	10.5	4.6	475	ホルンフェルス	
~	4	SB-09	磨 石	9.0	7.7	5.15	548	ホルンフェルス	
~	5	SB-09	磨 石	14.4	10.4	5.5	1250	花崗閃綠岩	
~	6	SB-09	磨 石	7.4	5.8	5.9	342	ホルンフェルス	
~	7	SB-09	磨 石	9.5	8.2	6.5	611	花崗閃綠岩	
~	8	SB-09	磨 石	7.2	5.6	8.0	447	花崗岩類	
~	9	SB-09	磨 石	10.5	5.85	4.5	401	ホルンフェルス	
~	10	SB-09	磨 石	10.8	8.5	3.9	567	花崗閃綠岩	
~	11	SB-09		7.15	4.5	2.3	89	泥質ホルンフェルス	
~	12	SB-09	磨 石	10.2	7.0	3.1	319	閃綠岩	
~	13	SB-09		8.5	3.5	1.15	36	ホルンフェルス	
~	14	SP-18	磨 石	15.8	8.3	7.05	1288	花崗閃綠岩	
~	15	SP-18	擦 器	7.0	5.6	2.55	113	ホルンフェルス	
~	16	SP-18	磨 石	10.9	8.4	7.1	883	花崗閃綠岩	
~	17	SP-33	磨 石	8.9	6.10	7.3	512	ディサート質溶結凝灰岩	
~	18	SP-33	磨 石	8.5	8.55		770	閃綠岩	
33	1	SB-02	磨 石	10.55	8.4	4.75	454	花崗閃綠岩	
~	2	SB-02	擦 器	13.5	12.1	5.75	1398	花崗閃綠岩	
~	3	SB-03	磨 石	9.8	12.6	6.5	1115	花崗閃綠岩	
~	4	SB-04	磨 石	16.1	9.2	7.3	1451	ディサート質溶結凝灰岩	
~	5	SB-04	磨 石	8.7	5.95	6.7	411	砂 岩	
~	6	SB-04	磨 石	9.85	4.0	8.25	426	ホルンフェルス	
~	7	SB-07	磨 石	9.1	9.4	3.45	384	ホルンフェルス	
~	8	SB-04外	砾 石	7.35	3.15	2.8	59	凝灰岩	
~	9	SB-06	砾 石	7.9	3.35	4.8	212	凝灰岩	
~	10	SB-06		4.8	2.5	4.8	9	珪質砂岩	
~	11	SD-03	石 盆	29.5	29.4	11.6	10800	花崗閃綠岩	
~	12	SP-32		2.3	2.05	0.65	3	黑曜石	
~	13	H-10		7.6	7.45	1.3	90	粘板岩	
~	14	SP-12		4.65	32.0	1.35	21	珪質砂岩	
31	1	SB-09	凹基三角錐	2.0	1.5	0.45	1.00	黒曜石	
~	2	SB-04	凹基三角錐	2.3	1.9	0.7	2.40	黒曜石	
~	3	SB-07	凹基三角錐	2.1	1.2	0.35	0.69	黒曜石	
~	4	SB-08	凹基三角錐	1.9	1.4	0.5	0.80	黒曜石	
~	5	SP-13	凸基三角錐	2.3	1.5	0.35	0.89	黒曜石	
~	6	SP-19	凹基三角錐	2.4	1.9	0.4	1.99	黒曜石	
~	7	SP-21	凹基三角錐	1.6	1.5	0.4	0.78	黒曜石	
~	8	SP-21	凹基三角錐	1.9	1.9	0.95	1.88	黒曜石	
~	9	SP-21	凹基三角錐	1.9	1.9	0.95	1.88	黒曜石	
~	10	SD-03	凹基三角錐	1.5	1.5	0.35	0.80	黒曜石	
~	11	SD-03	凹基三角錐	1.5	1.5	0.3	0.67	黒曜石	
~	12	SD-03	凹基三角錐	1.6	1.15	0.4	0.55	黒曜石	
~	13	SD-03	凹基三角錐	1.4	1.1	0.4	0.56	黒曜石	
~	14	SD-03	凹基三角錐	2.1	2.7	0.4	2.67	黒曜石	
~	15	SD-03	凹基三角錐	1.8	1.6	0.45	1.19	黒曜石	
~	16	採 集	凹基三角錐	2.1	1.5	0.4	0.73	黒曜石	

31	17	採集	凹基三角鑑	2.1	1.4	0.3	0.94	黒曜石						
~	18	採集	凹基三角鑑	2.1	1.3	0.35	0.84	黒曜石						
~	19	S P-14	石 鉗	1.3	2.5	0.6	2.22	黒曜石						
~	20	S P-19	石 鉗	2.1	3.2	0.6	6.48	黒曜石						
~	21	G-11	石 鉗	2.2	3.4	0.9	5.41	黒曜石						

第7章 まとめ

第1節 平安時代末の土器様相

平安時代末から鎌倉時代にかけての土器様相は、多くの研究者によって次第に明らかにされつつあるが、いまだ確定されたとは言えない。これは、8から9世紀代の遺跡数に比べて極端に遺跡が減少するようであり、また遺跡の選地条件が異なる点や、遺物が極端に少なくなる傾向、台地を掘り込んだ竪穴住居が減少する点など、遺跡として残り難い点などがあると思われる。

山梨県に限った場合、平安時代末に灰釉陶器が減少する傾向が伺われ、輸入陶磁器の白磁が出土すると、何ゆえか灰釉陶器が見られなくなる傾向がある。そこで、該期の住居址が数多く検出されている代表的な遺跡の住居址ごとの組成を示して、灰釉陶器や白磁の実態を示したい。

笠本地蔵遺跡の住居と土器組成

番号 住居	坪	間	小間	脚高 高台坪	脚高 高台屋	柱状 高台坪	柱状 高台屋	羽釜	釜	甕	鉢	その他	灰釉 陶器	白磁	備考
1	1		5			1								1	
2	3		10			1	1			2				1	
3															
4	1								1		2				
5		2													
6						1									
7	1	1										1	1		黄色漬戸
8			4			2				1					
9															
10											1				
11	1		4			4		1							
12															
13			8												
14	1														
15						1									
16	2														
17															
18															
19	1		2												
20															
22	2		1												
23			2			1									
24	3								2						

25			1										1
27			1										
28	1							1					
29			4						1				
30			1										
31	2		1										

北堀遺跡の土器組成

器種 住居	環	皿	小皿	脚高 高台坏	脚高 高台皿	柱状 高台坏	柱状 高台皿	羽釜	釜	甕	鉢	その他	灰粒 陶器	白磁	備考
2	1			1											
7	5		1			1									
9	1														
13	1														
20															
29												1			中世土器
30			1			2									
35	1														
36	2														
37	1									1					
40			3						1		2				

東新居遺跡の土器組成

器種 住居	環	皿	小皿	脚高 高台坏	脚高 高台皿	柱状 高台坏	柱状 高台皿	羽釜	釜	甕	鉢	その他	灰粒 陶器	白磁	備考
2	3			1				1		1					
3	1									2					
4		4	2		1						1				
5	1											5			
6	1														
7			8			6				1					
8	3			1						1					
9	2							1		1		2			
10	2									1		1			

二之宮遺跡の土器組成

器種 住居	環	皿	小皿	脚高 高台坏	脚高 高台皿	柱状 高台坏	柱状 高台皿	羽釜	釜	甕	鉢	その他	灰粒 陶器	白磁	備考
14	5		3	1				1	1		1	小壹1			
29	5	4			1							2			
30	6	4								2					
31	3														
55	3			2	3					2					
59	2(2)			2						1(l)					
81	3			5											
85	3											1			
86			1												
87	1				1										
88	1														

95	3	1						1	1				2		
175	1			1											
266	11(1)		3	1							1		1		
279	3		3	3							1				
西1	10								2	1	1				
西32	11			1					1	1		壹 1(1)			
西36	7			3											
西45	5(1)	1		2					1	3					
西57	3								1						
西81	24(2)	2		4									1		
西83				1		1	2			1(1)		壹 2(2)			

() 内は内数で明らかに時期の異なるもの

中田小学校遺跡の土器組成

器種 住居	环	皿	小皿	脚高 高台环	脚高 高台皿	柱状 高台环	柱状 高台皿	羽釜	釜	甕	鉢	その他	灰釉 陶器	白磁	備考
1	2			1						1					磁石 1
12	1		3												須恵器壹 1
13			3					1							網約 2
14			1		1									1	陶器 1

横畠遺跡土器組成

器種 住居	环	皿	小皿	脚高 高台环	脚高 高台皿	柱状 高台环	柱状 高台皿	羽釜	釜	甕	鉢	その他	灰釉 陶器	白磁	備考
6	6					2		2			1				2

勝沼バイパスの土器組成

器種 住居	环	皿	小皿	脚高 高台环	脚高 高台皿	柱状 高台环	柱状 高台皿	羽釜	釜	甕	鉢	その他	灰釉 陶器	白磁	備考
274 1号			5												
274 2号			2												
274 3号	3		11			2									
338 1号			5				4					1			
319 4号	3		10			3	9					1			漆物陶器 1

宮ノ前遺跡の土器組成

器種 住居	环	皿	小皿	脚高 高台环	脚高 高台皿	柱状 高台环	柱状 高台皿	羽釜	釜	甕	鉢	その他	灰釉 陶器	白磁	備考
80	5			2											
82	1			3									2		
106	3			1							1				
385	1												1		

中道遺跡の土器組成

器種 住居	环	皿	小皿	脚高 高台环	脚高 高台皿	柱状 高台环	柱状 高台皿	羽釜	釜	甕	鉢	その他	灰釉 陶器	白磁	備考
1	1		4					1							鉄製品 3
2		1										1			
3			3	1					1						漆 1点は 厚手
5		1											1		

二之宮遺跡、東新居遺跡、一ノ坪遺跡では灰釉陶器の出土割合が高いが、笠木地蔵遺跡、北堀遺跡、中田小学校遺跡では少ない傾向が見受けられる。また白磁は笠木地蔵遺跡、中田小学校遺跡、一ノ坪遺跡に見られる。いずれの住居址においても灰釉陶器は伴出していない。これは何らかの理由で灰釉陶器の搬入が絶たれ、それを契機に白磁の輸入陶磁器が九州博多方面からこの甲斐の国まで、急速に流入したものと思われる。その後急激にいわゆる六古窯なるものが勃興し、甲斐の陶器の世界はほとんどこの中の常滑、渥美、瀬戸、備前などが主流となり、輸入陶磁器は戦国時代の15世紀になってから、明の染付などが見られるようになる。輸入白磁などの研究は北九州の太宰府、博多周辺が出土量も多いことから、他地域の一つの指針となっている。中田小学校遺跡、一ノ坪遺跡出土の白磁碗はいずれも11世紀後半から12世紀初頭に位置づけられるものである。甲斐の国では永保3年(1083)富士山大噴火があり(扶桑略記)、康和2年(1100)僧寂円が写經を始めた(勝沼町白山平の經筒)頃にあたるが、鎌倉幕府成立後に比べると極端に文献史料の少ない時期である。この限られた時期に、最近の言葉でいえば、規制緩和、市場開放があって、爆発的に輸入陶磁器が流入したものと思われる。

この時期の土器編年については、坂本美夫氏による先駆的研究と近年資料の集積が図られた段階の森原明廣氏による研究がある。大方はこれらの研究の成果に負うところが多いのであるが、白磁を出土する住居址の組成に注目しながら、一ノ坪遺跡における見解をまとめておきたい。

白磁を出土する住居址は笠木地蔵遺跡1、2、25号住居址、中田小学校遺跡14号住居址、一ノ坪遺跡8号住居址である。それほど多い数ではないが、笠木地蔵遺跡1と25号住居址は底部破片であり、笠木地蔵遺跡2号住居址は口縁部破片、中田小学校遺跡14号住居址、一ノ坪遺跡8号住居址は口縁部から底部まで判明しているおり、時期的にも一致するものであろう。特に笠木地蔵遺跡2号住居址は出土遺物も豊富でこの時期の標準資料となり得るものである。森原氏も指摘するようにこの時期から柱状高台壇、皿が登場してくるが、脚高台の型式学的な変遷の中では捕らえられないものであり唐突な感じを与えるが、これは、上記の各遺跡ごとの組成からも支持されることである。

各遺跡の組成一覧表から、柱状高台壇のみで出土する場合、柱状高台壇と柱状高台皿が同時に出土する場合、柱状高台皿が出土する場合の組み合わせが考えられる。これを時間的変遷と捕らえ、白磁の様相を観察すれば、笠木地蔵遺跡1号住居址のものは、高台の疊付の部分が内側に削がれており、削がれないものより古い様相であるという編年觀が得られる。そこで、柱状高台壇と白磁をもつ笠木地蔵遺跡1号住居址を仮に1段階とし、柱状高台壇と皿と白磁を持つ笠木地蔵遺跡2号住居址を2段階とし、柱状高台皿をもち白磁を失う東新居7号住居址を3段階としておき、後日全体的な時期設定を試みたい。

なお、塩山市域にはこの1段階から2段階にわたる時期に甲斐源氏の安田義定が笛吹川流域方面に勢力を拡大していた時期であり、「吾妻鏡」には安田義定らの活躍が記されている。それらを支えた農民らの住居は当遺跡にも見るような状況であり、木製土器が発達してきたと思われ、土器は前時期と比べると誠に貧弱な様相を示す。ところが、特別な様相を示さない一般農民の住居と思われる所から、中国製白磁が出土することから東アジアの経済圏の中には確実に組み込まれていたということもできるのである。

参考文献

- 坂本美夫 1986 「甲斐国における古代末期の土器様相」『神奈川考古』23号神奈川考古同人会
- 森原明廣 1993 「山梨県地域における古代末期の土器様相——「甲斐型上器」の消滅とその後」『丘陵』14号甲斐丘陵考古学研究会
- 横田賀次郎・森田勉 1978 「太宰府出土の輸入陶磁器について——型式分類と編年を中心として——」『九州歴史資料館研究集録』4
- 山本信夫 1988 「北京朝貿易陶磁器の編年——太宰府出土例を中心として——」『貿易陶磁研究』8

第2節 11世紀から12世紀の日宗貿易について

9世から10世紀かけての中国の動乱は中国の社会全体に大きな影響を与えた。唐代は、門閥貴族の力が強く、華やかな社会であったがこの動乱によって彼らは没落、変わって新興の地主階級が台頭してきた。

唐代から茶は盛んに栽培されるようになったが、一般庶民にはまだ手の届く代物ではなかった。茶はこれら貴族らの嗜好品として愛飲され、その茶器として用いられた「唐三彩」は色鮮やかで優雅な感じさせるものであったが、性質的にはもろく耐久性に欠けていた。宋代にはいると、茶は高価なものではなくな

り庶民の間に飲茶の習慣が広まっていた。そして、このころから盛んに作られるようになった青磁や白磁などの磁器は、この習慣と相まって陶磁器の生産を飛躍的に増大させることとなった。

一方、絹織物・漆器・紙・鉄・銀・銅などの生産も発展し、こうした産業の発達は、唐代以来すでに盛んとなっていた商業をますます大規模なものとするとともに対外貿易をも盛んにしていった。

中国の貿易機構については、唐代以降の公貿易はすべて、広州・揚州・泉州などに設置された市舶司（税関）を通過しなければならず、厳しい検査などを経て商船は出港していった。

日本ではこのような中国商船がもたらした「唐物」は非常に珍重され、官貿易またあるときは民間人の手によって交易され、日本各地に運ばれていた。日本の受け入れの仕組みについては、9世紀は、中国商船が当時唯一の開港地である博多津に寄港すると、その報を受けて政府は、「交易唐物使」を派遣し、積載貨物を検査したうえで先買権を行なって公貿易を行った。そして政府の買い上げ終了後に民間による交易が行われた。しかしこのシステムは中国商人にとって低価で買い上げられる上に、長期滞在を強いられるなどうまみにかけていた。一方日本の民間貿易側にあっても、いわゆる「余り物」を購入しなければならないなど、不満が多く、このシステムは9世紀末には崩壊し始める。そこで政府もこのような貿易統制規定を緩和することによって、10世紀代はおむね維持された。しかし、11世紀にはいると唐物使派遣は停止（寛弘9年、1012年）され、貿易管理権は太宰府に委譲、私貿易の形態に近づき、次第に莊園貿易が主導権を握るようになつた。12世紀になると、前半では宋の8代皇帝が貿易振興策を積極的に押し進め、また国内では九州の寺社が海岸沿いに自己の莊園を確保し、不入権をいかして宋船を直接ここに入港させる莊園貿易が顕在化した。12世紀後半にいたるまで、日中貿易の扱い手はあくまで中国商人であつて日本人が中國へ赴くことはなかつた。それは政府により海外渡航が禁止されていたからであるが、平清盛によって対外貿易は積極的に推進され、宋へ渡航するものがでてくる一方、瀬戸内海に宋船を積極的に受け入れ、開国的な方針がとられた。

晚唐から五代、北宋にかけて、中国からもたらされた、いわゆる輸入陶磁は越州窯青磁（浙江省）、長沙瓦渣坪窯黄釉陶、江南地方民窯白磁が代表的なものである。9世紀から11世紀にかけてのこの時期は上記ですでに述べたように官貿易は制度として存続し、すべての唐物は博多にはいるため、その輸入品は限られた地域にしかももたらされていない。現在まで確認できる遺跡は、太宰府鴻臚館跡、太宰府政府跡、福岡筑後の平野部遺跡や薩摩などの西南海道の国府跡、中国地方では周防などの国府跡、国分寺跡、畿内では平安京と西寺・広隆寺・仁和寺・法隆寺・藥師寺などに限られ、特に鴻臚館跡からは2,500片以上が検出されている。なお東日本では、宮城県多賀城外郭の五万崎遺跡から越州窯青磁などが数点出土しているのみである。

これらから出土の越州窯青磁は、12世紀のはいると、生産が衰退したようでその出土量は激減するが、この時期の出土例としては他を圧倒している。器種については、碗・皿・水注・合子・壺・唾壺および托である。このうち碗と皿の出土量は多く、かつ様々な形態がみられるが、壺などは器面に装飾を施したものは極めて少なく鴻臚館跡から出土したもののなかに彫花や釘彫のある破片が確認できるのみである。

長沙瓦渣坪窯の製品は、その出土例が少ない。すべて10世紀以前の輸入品であるが、久留米西谷火葬墓出土の壺、筑紫野市大門出土の水注、奈良藥師寺西僧房跡出土の水注、京都四条御前通遺跡出土の水注などがあげられる。

白磁については、この時期輸入された量そのものが少なく、種類も限定されている。滋賀大津市出土の水注や京都仁和寺八角円堂跡出土の合子などがある。

10世紀から11世紀にかけての輸入陶磁は輸入量及びその出土量は、極めて少なく分布もかなり限定された狭いものであることがわかった。しかし11世紀も後半から12世紀になると輸入陶磁は質量とともに豊富になってくる。確かに貿易形態の変革は大きな要因である。しかし、そのほかに経塚の影響もあげられる。仏教の思想である末法思想は天変地異が起こる末法の世を経て弥勒が出現し、人々を救済するとされるが、その時お経が滅んでいたのでは救われないと、お経を保存する経塚が築かれたとされている。最古のものは藤原道長が金峰山に埋経をおこなった寛弘4年（1007）ものとされているが、11世紀後半以降、日本各地で盛んに経塚が築かれしていく。この経塚に納められたお経の経容器や副葬品に輸入陶磁が用いられている。特に副葬品の合子や小壺類は白磁のものがほとんどで西日本から関東地方にかけての経塚に普遍的にみられている。

参考文献

- 1 大山義平 1984 「中世の日本と東アジア」『謹座日本歴史3 中世I』 東京大学出版会
- 2 田代 孝 1995 「古代の經塚—埋經の經塚—」『山梨の經塚信譲』 山日ライブリー
- 3 満岡忠成 1977 「宋愛と日本文化」『世界陶磁器全集』12 小学館
- 4 長谷部泰郎 1972 「諸米美術(陶芸)」「原色日本の美術」 小学館

第3節 底部穿孔埋甕について

底部穿孔埋甕については1982年にまとめたことがあるが、その後1994年には長沢宏昌氏が別の視点からまとめている。82年の時点より資料が集積されたので、それらを加えて考察をしておきたい。縄文前期以降土坑内に土器を埋設することはよく知られており、埋葬施設という考え方もあるが、確証の少ないものである。縄文中期では盛んに土坑内に土器が埋設される。駿迎堂S-1区の土坑群や塩山市柳田遺跡、北原遺跡の土器出土状況は驚きに値する。

底部穿孔埋甕の時期については触れていないが、一ノ坪遺跡のものが曾利式第3段階に属するもので、底部穿孔埋甕としては、比較的新しい部分に属する。市川大門町宮の前遺跡、甲ヶ原遺跡例のように屋外単独のものは曾利古式第1段階に属するもので、古段階に属するものは屋外単独埋甕である傾向が強く、曾利式の古段階から新段階に移行する曾利式土器の最も盛行した時期に屋内埋甕として採用されてくると思われる。

第8章に一ノ坪遺跡底部穿孔埋甕内の土の土壤分析結果が示されているが、埋葬施設としての確証はない。しかし、町田遺跡、駿迎堂遺跡の底部穿孔埋甕を数多く調査した経験からは、埋甕の中の土は締まりのほとんどないもので、埋甕内は空隙であったか、何らかの有機質が入っていたと思われる。また類例は少ないが駿迎堂遺跡では土製円盤3、土製薄円盤10点を出土した例がある。

埼玉県坂東山遺跡の後期初頭称名寺式の底部欠損逆位埋甕は成人骨が充填されており、成人骨改葬墓として認識されている。そうすると本県の屋外底部穿孔埋甕も成人骨改葬墓の可能性が高いのであるが、屋内のこうした埋甕については、民族事例からも共同体の成員として認められていない、乳幼児の墓ではないかと思考される。

埋甕の分類は駿迎堂IIの分類基準にもとづく。

1 場 所

0 不 明 I 屋内出入口部 II 屋内その他 III 屋 外

2 埋甕の状態

A 不 明 B 正 位 C 逆 位 D その他

3 埋甕の底部の状況

0 不 明 1 底部あり 2 底部穿孔 3 底 抜 4 底 欠

4 埋甕の口辺部の状況

a 不 明 b 口辺完存 c 口辺一部欠損 d 口辺斜位欠損 e 口辺水平欠損

5 石蓋の有無

0 無 1 有

参考文献

- 1 小野正文 1984 「底部穿孔埋甕小考」『甲斐の地域的展開』雄山閣
- 2 長沢宏昌 1995 「甲府盆地にみられる縄文時代中周の土壙墓と土器格再葬墓——井戸尻式—曾利工式期の土器——」『研究記要』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

遺跡名	遺構名	所在地	分類	時 期	文 獻	備 考
住 吉	2号住居址	都留市法能	I C 2 c 0	曾利新	1	
久保地	12号住居址	都留市久保地	I C 4 b 0	~	2	
~	~	都留市久保地	I C 2 b 0	~		
~	23号住居址	都留市久保地	I C 4 e 0	~		

宮の前	5号住居址	西桂町下幕地	I C 3 b 0	曾利古	3	同住居址から釣り手土器出土
殿 林		塙山市上萩原	III C 1 b 0	曾利古	4	他の底部が被覆
町 田	3号住居址	塙山市下於曾	I C 4 b 0		4	
~	~	~	I C 2 b 0	曾利新		
~	~	~	I C 2 b 0	曾利古		浅鉢を利用
~	5号住居址	塙山市下於曾	I C 2 b 0	~		
舞 露 敷		塙山市上萩原	III B 1 b 0	井戸尻	4	
一ノ坪遺跡	K-23	塙山市瓶野	III C 2 b 0	曾利新		
牛 岩	7号土坑	塙山市牛奥	III C 4 e 0	曾利古	5	
駅遊堂S-I	S B-37	勝沼町藤井	I C 2 b 0	曾利新	6	
駅遊堂S-II	S B-37	勝沼町藤井	I C 2 b 0	~		
駅遊堂S-III	S B-59	勝沼町藤井	I C 2 c 0	曾利古		
駅遊堂S-IV	S B-64	勝沼町藤井	I C 2 e 0	~		
駅遊堂S-V	S K-23	勝沼町藤井	O C 2 b	~		
駅遊堂S-VI	I-5	勝沼町藤井	O C 2 b	~		
駅遊堂S-VII	S B-04	勝沼町藤井	I C 2 b 0	~		
駅遊堂S-VIII		勝沼町藤井	O C 4 d	~		
駅遊堂S-IX		勝沼町藤井	O C 3 c	~		
駅遊堂S-X		勝沼町藤井	O C 2 e	~		
駅遊堂S-XI	F-6	勝沼町藤井	O C 4 b	~		
駅遊堂N-I	S K-05	勝沼町藤井	III C 4 e 0	~		
駅遊堂N-II	S K-05	勝沼町藤井	III C 4 e 0	~		
駅遊堂S-V	1号埋甕	一宮町野呂原	III C 4 e 0	~		
駅遊堂S-V	3号埋甕	一宮町野呂原	III C 4 e 0	~	7	
駅遊堂S-V	4号埋甕	一宮町野呂原	III C 4 e 0	~		
駅遊堂S-V	5号埋甕	一宮町野呂原	III C 4 e 0	~		
北 塚	59号住居址	一宮町塙田	I C 3 e 0	曾利新	8	
北 塚	61号住居址	一宮町塙田	I C 4 e 0	~		
北 塚	1号単独埋甕	一宮町塙田	III C	~		
国 分		一宮町国分	O O 2 e	曾利古	9	穿孔2孔で小石詰まる
三 光	1号土坑	御坂町竹居	III C 2 b 0	~	10	
桂 野		御坂町下黒物	O O 2 e	~	11	
柳 原		境川村	O O 2 d	~	12	
小山西原		境川村	O O 2 b	曾利新	13	
一の沢西		境川村	III C 4 b 0	曾利古	14	
上野原	3号単独	中道町上野原	III C 4 c 0		15	
上野原	5号単独	中道町上野原	III C 4 b 0		15	
上野原	7 b 住居址	中道町上野原	III C 2 b 0		16	「中道町史」掲載
~	12号住居址	中道町上野原	III C 2 b 0		16	「中道町史」掲載
大 塚		三ツ町大塚	O O 2 e		17	
代 中		豊富村木原	O O 2 b	曾利新	17	
宮の前	1号単独埋甕	市川大門黒	III C 2 b 0	曾利古	18	
宮の前	2号単独埋甕	市川大門黒	III C 2 e 0	井戸尻		
上石田	C13地点	甲府市上石田	III C 2 b 0	曾利古	19	
上石田		甲府市上石田	III C 2 b 0	~	20	
飯米場		蓋崎市飯坂	O O 2 b	~	21	
~	~	O O 2 e	~			
~	~	O O 2 d	~			
坂 井		蓋崎市藤井	III C 4 e 0	~	22,23	
		須玉町	O O 2 b	~	22	『坂井』に掲載

岩 篤		小瀬沢町岩塙	S 02 b	*	23	
永 井		明野村	S 02 b	曾利古	24	
上神取		明野村	S 02 e	*	24	
甲ヶ原	1号埋蔵	大泉村下井出	III C 2 b	*	25	2個体が入れ子状に出土

出典文献

- 都留市教育委員会 1973 「往古遺跡」
- 都留市 1976 「都留市史」資料編
- 西桂町教育委員会 1993 「宮の前遺跡発掘調査報告書」
- 石黒良行・山田恵美子・高間幸恵 1970 「都留高等学校所蔵の中期绳文土器」『甲斐考古』7-3
- 塙市山 1998 「塙市史」原始古と中世編
- 小林宏和ほか 1984 「牛糞防護調査報告書」山梨県教育委員会
- 小野正文ほか 1976 「駿遊堂」山梨県教育委員会
- 長沢宏昌ほか 1976 「駿遊堂」山梨県教育委員会
- 長沢宏昌 1987 「北堀遺跡」山梨県教育委員会
- 森和 敏 1980 「村上遺跡」山梨県教育委員会一宮町国分小字南条215番地出土の底部穿孔土器、境川小山西原出土の底部穿孔土器を参考図として掲載
- 室伏徹ほか 1979 「御坂町の埋藏文化財」甲斐丘陵考古学研究会
- 山本寿々雄 1959 「甲斐中期绳文の資料から」「鼎立富士国立公園研究報告」2
- 室伏 勲 1976 「柳原遺跡出土の大型彫形土器」「丘陵」1-1甲斐丘陵考古学研究会
- 長沢宏昌 1985 「一の武西遺跡」山梨県教育委員会
- 中道町 1975 「中道町史」
- 中山誠二 1987 「上野原遺跡」山梨県教育委員会
- 森本圭一・石黒良行 1971 「東・西八代郡出土の绳文土器」『甲斐考古』9-1山梨県考古学会
- 長沢宏昌 1996 「宮の前遺跡発掘調査報告書」山梨県教育委員会
- 上川名昭 1979 「上石田遺跡」
- 山本寿々雄 1970 「甲府盆地底盤出土の旧石器文化ならびに绳文中期の遺跡について」『甲斐考古』7-3 山梨県考古学会
- 森本圭一 1968 「山梨県考古図譜」
- 諏崎市 1978 「諏崎市誌」
- 志村淹藏 1975 「坂 井」
- 小瀬沢町 「町内遺跡群分布調査」
- 山本茂樹・今福利恵 1992 「甲ヶ原遺跡概報」『山梨県教育委員会

第4節 一ノ坪遺跡の性格について

一ノ坪遺跡の平安時代末の住居址はS B02、03、06、07、08である。このうちS B02にカマドがなかったが、他の住居にはコナーにカマドがあり、いずれも北東隅であるが、S B08は南東隅に存在していた。S B03はS D01廃絶後であり、S B06はS D01の延長上溝を切って構築されていた。S B07はS D03に切られて構築されていた。このように、水路と住居の関係は短期間の中に幾つかの重複関係が見られた。しかしながら、水路と密接に結びついた集落であると考えられる。S P08はS D03から、S P07はS D02からそれぞれ水路を引き込んだ土坑であるし、底がラフスコ状の床のS B04、S B05、S P16はカマドを持たないので、作業用の施設ではないかと思われ、S D04、05は竪穴の周辺に掘立柱建物の柱穴を供えている。

水路のS D03はほとんど真北方向であり、条里線と一致するように思える。S D05と交差する部分が一段と低く、水溜状をなし、水量調整と泥などの沈殿を図ったものと思われる。ところが、一ノ坪遺跡の溝はいずれもが、底に砂や泥の堆積が認められず、極短期間に使用されたものと思われる。

S P12は底部を動物によって搅乱されていたが、人間がある目的を持った施設を作ったようには思わないもので、掘ることを目的としたような印象を受けた土坑である。灰釉陶器などもあることから、同時代の遺構であることは確かである。

挿図20、21図に示した土坑群は覆土が他の土坑とは違い、明るい茶褐色を示し、ほとんど単一な土層であったので、時期的に後出のものであったと思われる。

さて、一ノ坪遺跡の溝は水田用の水路ではなく、両側に河川が流れていたと思われる所以、飲料水用の水路とも考えられず、水を使った作業を目的とした集落のように思える。

そこで、塩山地域に残る金山伝説との関係を考え、土壤分析を依頼したが、分析資料の絶対量の不足もあって、以下の分析報告でも、鉱物分析は省略した。因みに塩山地域には国史跡に答申されている黒川金山のほかに、玉宮地区の平沢の金坑、鈴鹿山・高芝山の金坑、神金地区の上条の黄金沢などの地名伝承、市街地では下於曾地区的金山衆の屋敷群、千野、熊野地区周辺には金に関わる伝説を残している。そこで、水を使っての作業が欠かせない金に関する施設ではないかと考えたところであるが、推測の域を出でていない。

第8章 一ノ坪遺跡の自然科学分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

塩川左岸の微高地に位置する一ノ坪遺跡では、平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、溝、土坑などが検出されているが、これらの遺構のうち竪穴住居跡・掘立柱建物跡以外のものについては、その性格が明らかにされていない。ここでは、これらの遺構の性格に関する情報を得るために、自然科学的手法を用いた分析を行う。

対象とする遺構は、土を探るために掘られたと考えられている採土坑と浅い部分や深い部分を作つて流水をコントロールしたと考えられている3号溝、および墓坑の可能性がある27号土坑の3遺構である。このうち採土坑については、古くから塩山地域で行われていたといわれている砂金の採取に関わるものではないかとも考えられている。採取された土層はやや砂質な褐色のいわゆるローム層であるが、その中には腐植質の土壤ブロックも認められ、これらの土層と砂金との関係を探る。3号溝が機能していた頃の溝内の水の状況（例えば常時帯水していたのかなど）および溝周囲の状況を調べ、その性格に関する資料とする。27号土坑では、覆土と周囲の自然土層との特性の違いから、土坑内に動物遺体が埋納された可能性を探る。なお、比較資料として、調査区より検出された縄文時代前期のものとされる埋葬内の土についても分析を行う。

I. 3号溝の性格

1. 試料

試料は、3号溝の3カ所の断面から採取した溝覆土である。覆土はいずれも黒褐色の砂質シルトであるが、溝の壁を構成している黄褐色砂の混入も認められる。採取箇所は、北から第1地点、第2地点、第3地点とする。

第1地点では、試料番号1～7までの7点を採取した。試料番号1、2は、溝覆土の上部と中部、試料番号3、4は溝覆土の下部、試料番号5は溝底直上の試料である。試料番号6は溝底下に掘られた水溜まり？と考えられている凹みの底の土であり、試料番号7はこの凹みの壁を構成している自然堆積層である。第2地点では、溝覆土中部から試料番号1を採取し、溝底直上から試料番号2を採取した。第3地点では、試料番号1～7までの7点を採取した。試料番号1、2は、溝覆土の最上部と上部、試料番号3は溝覆土の中部、試料番号4～6は溝覆土の下部で三角堆積している。試料番号4～6の層準は上位より試料番号が若い順である。試料番号7は溝底に堆積する黄褐色砂のブロックである。

分析は、3地点とも溝底直上および覆土下部の試料を対象とし、第1地点の試料番号3～7、第2地点の試料番号2、第3地点の試料番号4～7の合計10点を選択した。

2. 分析方法

溝内の水城環境を推定するために、前述の採土坑に関する分析で用いた珪藻分析を行い、また溝周囲の草本植生の状況や溝の埋積状況などを推定するために植物珪酸体分析を行う。珪藻分析の処理過程は前述の通りである。以下に植物珪酸体分析の処理過程を述べる。

湿重 5% 前後の試料について、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理 (70W, 250kHz 1分間)、沈定法、重液分離法 (ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5) の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、ブリュウラックスで封入しプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部 (葉身と葉鞘) の葉部短細胞に由来した植物珪酸体 (以下、短細胞珪酸体と呼ぶ) や葉身機動細胞に由来した植物珪酸体 (以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ) を、近藤・佐瀬 (1986) の分類に基づいて同定・計数する。

3. 結果

(1) 硅藻分析

いずれの試料でも珪藻化石は少なく、最高でも18個体しか検出されていない。第1地点の試料番号7をはじめ第2地点の試料番号2、第3地点の試料番号4は皆無である (表4)。検出された珪藻化石は、淡水生種であり、9属・13種類が検出された。以下、結果の詳細については、地点別に述べる。

● 第1地点

産出した種群の生態学的な特徴は、主に塩分・pH・流水に対する適応性についてみると以下のようない傾向が認められる。まず、塩分濃度に対する適応性は、淡水中の塩類濃度に対して比較的塩類の濃度が高い水域を好む種を好塩性種とし、低濃度を好む種を嫌塩性種、いずれにも適応する可能性がある種を不定性種というように3段階で区分したものである。本地点においては、全体に貧塩一不定性種が優占し、貧塩一好塩性種および貧塩一嫌塩性種はいずれも少ない傾向にある。

3号溝の珪藻分析結果

種類	生態性		環境指標種	第1地点					第2地点		第3地点			
	塩分	pH		3	4	5	6	7	2	4	5	6	7	
Caloneis bacillum (Grun.) Cleve	0 gh-ing	al-il	rph	U	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
Cymbella mesiana Chodat	0 gh-ing	al-bi	lbi	O	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Cyberella turgidula Grunow	0 gh-ing	al-il	rph	KT	—	—	—	3	~	—	—	—	—	—
Diploneis sp.-1	0 gh-unk	unk	unk	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—
Gomphonema parvulum Kuetzing	0 gh-ing	ing	ind	U	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	0 gh-ing	al-il	ind	RA,U	1	1	1	4	—	—	—	—	—	—
Navicula confervacea (Kuetz.) Grunow	0 gh-ing	al-bi	ind	RB,S	—	—	4	3	—	—	—	1	—	1
Navicula communis Grunow	0 gh-ing	al-il	ind	RAT	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—
Navicula sp.	0 gh-unk	unk	unk	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
Nitzschia amphibia Grunow	0 gh-ing	al-bi	ind	S	—	1	—	3	—	—	—	—	1	1
Nitzschia breviserrata Grunow	0 gh-hil	al-il	ind	RB,U	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
Nitzschia palea (Kuetz.) W.Smith	0 gh-ing	ing	ind	S	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
Pinnularia acerosphaera W.Smith	0 gh-ing	al-il	lph	O	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
Pinnularia spp.	0 gh-unk	unk	unk	—	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Synedra ulna (Kuetz.) Ehrenberg	0 gh-ing	al-il	ind	U	4	1	10	4	—	—	—	—	—	1
海水生種合計				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
海水・汽水生種合計				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
汽水生種合計				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
淡水生種合計				10	5	18	18	0	0	0	2	1	3	
珪藻化石総数				10	5	18	18	0	0	0	2	1	3	

凡例

H.R. : 塩分濃度に対する適応性
0 gh-hil : 貧塩好塩性種
0 gh-ind : 貧塩不定性種
0 gh-unk : 貧塩不明種

ph : 水素イオン濃度に対する適応性
al-bi : 真アルカリ性種
al-il : 好アルカリ性種
ind : pH不定性種
unk : pH不明種
ac-bi : 真酸性種

C.R. : 流水に対する適応性
lph : 好止水性種
ind : 流水不定性種
rph : 好流水性種
unk : 流水不明種

環境指標種

K : 中一下流河川指標種
S : 好汚潤性種
RI : 陸生珪藻 (RA : A群, RB : B群, 伊藤・堺内 : 1991)

O : 沼澤湿地付着生種 (以上は安藤, 1990)

U : 広適性種

T : 好清流水性種 (以上はAsai,K. & Watansabe,T. 1995)

次に pHに対する適応性は、水の pHにより、弱酸性、アルカリ性、いずれにも適応する可能性がある不定性種の 3 段階で区分したものである。結果は、好アルカリ性種が優占し、pH 不定性種および不明種を伴うもので、好酸性種は産出していない。

さらに、流水に対する適応性とは、流水域に付着生育する種を好流水性種、止水域に生育する種を好止水性種、いずれにも生育可能と思われる種を不定性種として 3 区分している。流水不定性種が大半を占めているが、好流水性種および好止水性種も低率ながら産出している。

一方、水生珪藻と陸生珪藻の比率は、試料番号 5 および 6 では、陸生珪藻が優勢であるが試料番号 3 および 4 については殆どが水生珪藻である。

● 第 2 地点

本地点の試料番号 2 からは、珪藻化石が検出されない。

● 第 3 地点

試料番号 5、6 および 7 からは、珪藻化石が検出されたが、極めて少なく数個体である。産出した種の特徴は、貧塩一不定性、好アルカリ性、流水不定性種に属す種類である。また、殆どの種群が陸生珪藻あるいはこれに含まれる種群である。

(2) 植物珪酸体分析

結果を表 5、図 2 に示す。各地点の試料からは植物珪酸体が検出されるが、保存状態の悪いものが多く、表面に多数の小孔（溶食痕）の認められるものがある。以下に、各地点の産状を述べる。

● 第 1 地点

試料番号 7 では検出個数が少なく、栽培植物のイネ属やタケ亜科、ウシクサ族がわずかに認められるに過ぎない。試料番号 6～3 ではタケ亜科が優占し、イネ属、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。

● 第 2 地点

検出個数が少なく、タケ亜科やウシクサ族がわずかに認められるに過ぎない。

● 第 3 地点

試料番号 7～4 ではタケ亜科が優占し、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。

試料番号 7～5 ではイネ属が認められるが、試料番号 4 ではイネ属は産出しない。

3 号溝の植物珪酸体分析結果

種類	地点名 試料番号	第 1 地点					第 2 地点 試料番号	第 3 地点		
		3	4	5	6	7		2	4	5
イネ科葉部短胞珪酸体										
イネ属イネ属		5	—	7	2	—	—	—	—	—
タケ亜科ネザサ節		—	—	1	3	—	—	—	—	—
タケ亜科		124	152	167	105	48	24	165	144	139
ヨシ属		11	8	12	5	1	3	5	6	6
ウシクサ族コブナガサ属		—	—	1	1	—	—	—	—	1
ウシクサ族スキ属		24	41	76	29	7	5	35	52	50
イチゴツナギ亜科		4	2	6	3	—	1	2	3	6
不明ヒビ型		20	21	32	30	3	7	11	29	21
不明ヒゲシハ型		13	18	28	18	8	1	10	15	16
不明ダンチク型		17	17	25	18	8	2	14	22	16
イネ科葉身機動細胞珪酸体										
イネ属イネ属		17	—	6	6	1	3	—	1	7
タケ亜科ネザサ節		1	1	1	1	—	—	1	—	1
タケ亜科		43	57	15	40	3	8	52	48	53
ヨシ属		9	2	14	1	1	2	3	—	5
ウシクサ族		39	40	42	48	1	9	24	32	29
不明		31	15	43	37	7	13	36	50	51
合計										
イネ科葉部短胞珪酸体		218	259	355	214	75	43	242	271	254
イネ科葉身機動細胞珪酸体		140	115	121	133	13	35	116	131	145
総計		358	374	476	347	88	78	358	402	399

4. 考 察

試料中には、いずれも珪藻化石が少なく、水域環境を解析できる産状ではない。ただし、珪藻化石が少な

いこととわざかに認められた種群からは、以下のようなことが考えられる。

まず、溝の壁を構成している堆積層である第1地点の試料番号7で珪藻化石が全く産出しないことは、この堆積層が離水した段丘上に形成された風成のローム層であることを示している。

次に、第1地点の水溜まりの底および溝底の堆積物である試料番号6および5は、陸生珪藻主体の群集が認められた。陸生珪藻とは、たとえばコケを含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壤の表層部（地表）など大気に接触した環境に生活する極限られた一群（小杉、1988）である。また、伊藤・堀内（1991）によれば、堆積物の分析を行った際、これらの種群が優占する結果が得られれば、その試料が堆積した場所は、水域以外の空気に曝されて乾いた環境であったことが推定できるとしている。そのため、これら陸生珪藻は、単に乾湿の状況を知ることができるだけでなく、遺跡の調査等における遺構内の様態状況を理解する上で重要な示唆を与えてくれることが期待される種群である。特に今回いずれの試料にも認められた *Hantzschia amphioxys* は、伊藤・堀内（1989；1991）が乾燥の程度によって大きく2つに分けた種群（A群・B群）の中のA群と呼ばれる分類群に属する種である。このA群は、そのほとんどが水中には少なく、陸域に特徴的な種群といってもよい。また、*Hantzschia amphioxys* は、A群の中でも乾燥に対する耐性が強く、空中湿度も低く、表土等の水分量が10%よりも低い状況下（湿り気のない樹木の幹、コケおよび乾燥した地表）に付着して生育していくことができる種とされる。

したがって、溝底の覆土は、水の影響が殆どなく乾いた環境下において堆積した溝周囲の土層に由来する堆積物であると考えられる。一方、植物珪酸体分析では、第1地点の試料番号5や第3地点の試料番号7に、湿润な場所に生育するヨシ属の植物珪酸体が他の層位よりもわざかに多く認められた。以上のことから、3号溝は常時帯水あるいは常時水が流れてはいはず、空掘のような状態かごく短時間しか水が流れなかつたものと推定される。

ところで、溝覆土が溝周囲の土層に由来するとすれば、試料中に認められたタケ亜科、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などの植物珪酸体は、調査区周辺にこれらのイネ科植物が生育していたことを示唆している。また、各地点でわざかに認められたイネ属の植物珪酸体は、調査区の周辺域で稻作が行われていたことも示唆する。

II. 27号土坑および縄文時代前期の埋甕の内容物について

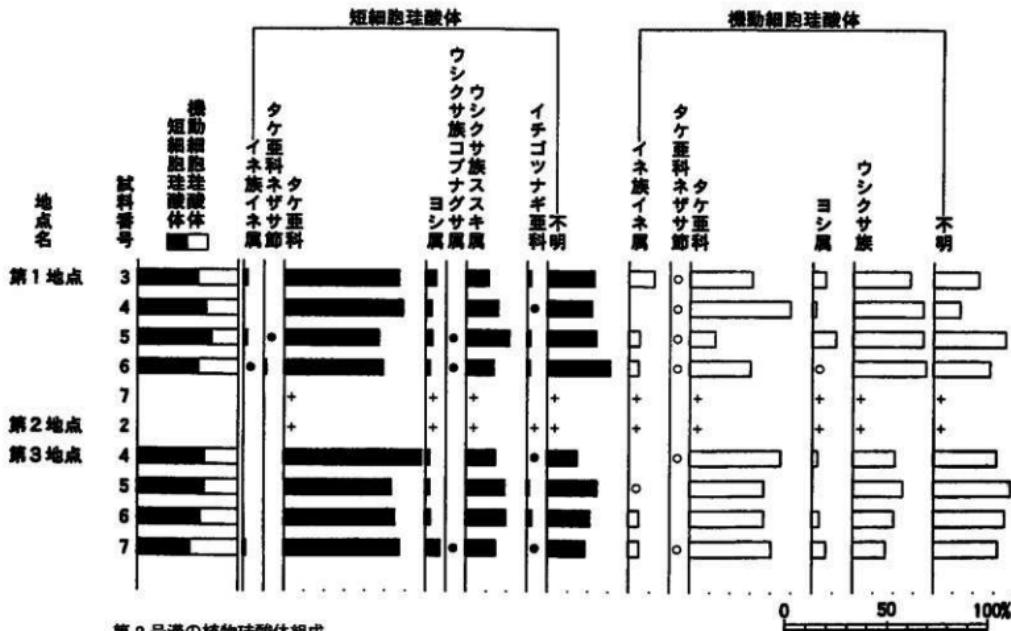
1. 試 料

試料は、27号土坑の坑底直上より採取した覆土試料1点と、比較対照試料として27号土坑の壁を構成している土層から採取した対比試料1～5の5点、さらに調査区内より出土した縄文時代前期の埋甕内覆土1点の合計7点である。これらのうち、対比試料1～3は、壁を構成している3層の土層（上部の暗褐色砂質シルト層、中部の黒褐色シルト質砂層、下部の暗褐色砂層）からそれぞれ採取し、対比試料4、5は土坑の確認面から平面的に採取したものである。

2. 分析方法

分析は、土壤標準分析・測定法委員会編（1986）、土壤養分測定法委員会編（1981）、京都大学農学部農芸化学教室編（1957）、農林水産省技術会議事務局監修（1967）、ペドロジスト懇談会（1984）などを参考にした。以下に、分析方法を示す。

試料を風乾後、軽く粉碎して2.0mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105°C、5時間）により測定する。風乾細土試料2.00gをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸（HNO₃）5を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（HClO₄）10を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で、100に定容して、ろ過する。今回は、リン酸含量をリン酸（P₂O₅）濃度として測定する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P₂O₅mg/g）を求める。



出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の種類、十はイネ科葉部短細胞珪酸体で200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体で100個未満の種類を示す。

3. 結 果

各試料の値を表6に示す。土坑覆土試料は1.27P2O5mg/gを示すが、対比試料および埋甕内土は0.6~0.9P2O5mg/gの範囲内である。

4. 考 察

リン酸のいわゆる天然賦存量の報告例(Bowen, 1983; Bolt・Bruggenwert, 1980; 川崎ほか, 1991; 天野ほか, 1991)によれば、上限は約3.0P2O5mg/g程度と推定される。また、人為的な影響を受けた既耕地では5.5P2O5mg/g(黒ボク土の平均値)という報告例がある(川崎ほか, 1991)。今回の試料はいずれも、この天然賦存量からすれば、リン酸、カルシウムとともに特に富化を指摘できる結果ではない。しかし、土壤中のリン分は、土壤形成過程における条件によっては、拡散してしまうことはよく知られている。本分析試料の場合は、千年以上の時間を経ていることから、単純に天然賦存量の範囲内であることでリン酸の富化はないということはできない。特に土坑覆土試料のみが、ややはざれて高い値を示していることは、土坑内にリン酸含量を富化させるような要因があったことを示唆している。すなわち、動物遺体が埋納されていた可能性がある。同じ調査区から5号土坑のような火葬墓が検出されていることを考慮すれば、27号土坑も同様な土坑である可能性はある。

一方、縄文時代前期の埋甕内土壤のリン酸含量は対比試料と同様の値を示しており、動植物遺体が存在したかは判断がつかない。本試料については出土状況を合わせて評価したい。

引用文献

- 安藤一男(1990)淡水漬珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理, 42, p.73-88。
天野洋司・太田 錠・草場 敏・中井 信(1991)中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省 農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生蓄積利用技術の開発」, p.28-36。
Bolt,H.G.・Bruggenwert,M.G.M.(1980) 土壤の化学。岩田進一・三輪幸太郎・井上隆弘・陽 健行訳,309p.,学会 出版センター【H.G.BOLT and M.G.M.BRUGGENWERT (1976) SOIL CHEMISTRY】 , p.235-236.
Bowen,H.J.M.(1983) 地球無機化学-元素の循環と生化作用-。浅見邦男・茅野充男訳,297p.,博友社。
土壤標準分析・測定法委員会編(1986) 土壤標準分析・測定法, 354p.,博友社。
土壤養分標準法委員会編(1981) 土壤養分分析法, 440p.,齊藤堂。
藤原 正(1979) カルシウム、地質調査所化学分析法, 52: 57-61, 地質調査所。
伊藤良永・堀内誠志(1986) 古環境解説からみた陸生珪藻の被封-陸生珪藻の細分-。日本珪藻学会第10回大会 演説要旨集,p.17。
伊藤良永・堀内誠志(1991) 「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解説への応用」。日本珪藻学会誌, 6巻,p.23-44。
加藤芳郎(1970a) 東海地方の「黒ボク」土壤のH₂O-脱鉄-タム逐次処理によるリン酸吸収係数の変化について。 土肥誌, 41, p.218-224。
加藤芳郎(1970b) 黑腐質土壤の非晶質成分の形態に関する一つのモデル(予報)。ペドロジスト, 14, p.16-21。
川崎 弘・吉田 錠・井上恒久(1991) 九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省 農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生 蓄積利用技術の開発」, 149p.; p.23-27。
近藤聰三・佐瀬 隆(1986) 植物珪酸体分析、その特性と応用。第四紀研究, 25, p.31-64。
小杉正人(1986) 陸生珪藻による古環境の解析とその意義-わが国の導入とその展望-。植生史研究, 第1号, P.9-44。
熊田恭一(1981) 硅藻類の化学的性質(2)。[土壤と微生物の化学 第2部], 304p.,学会出版センター: p.43-79。
京都大学農学部農芸化学教室編(1957) 農芸化学実験書 第1巻, 411p.,農業団書。
三村弘二・加藤祐三・片田正人(1984) 地域地質研究報告5万分の1岡山県 舞子・宍粟・仙崎地域の地質, 61p., 地質調査所。
三土正則(1985) 無機非晶質物の量と組成に関する分類学的指標。土肥誌, 56, p.189-195。
三好 洋・鶴田永生・石川昌男・伊達 界(1983) リン酸吸収係数。「土壤肥料用語辞典」, 259p.,農文協: p.103-104。
本名義正・山本定博(1992) 黑腐の簡易分析法。日本土壤肥料学会編「土壤肥育成分分析法」, 126p.,博友社: p.7-35。
日本の地質「中部地方I」編集委員会(1988) 日本の地質4 中部地方I, 332p.,共立出版。
農林水産省農林水産技術会議事務局監修(1987) 新版標準土色貼。
大羽 本名(1984) 大羽 裕・本名義正(1984) 黒ボク土判定のための薪緒の分析法。土肥誌, 55, p.55-61。
ペドロジスト懇談会(1984) 野外土性の判定。ペドロジスト懇談会編「土壤調査ハンドブック」, 156p.; p.39-40。

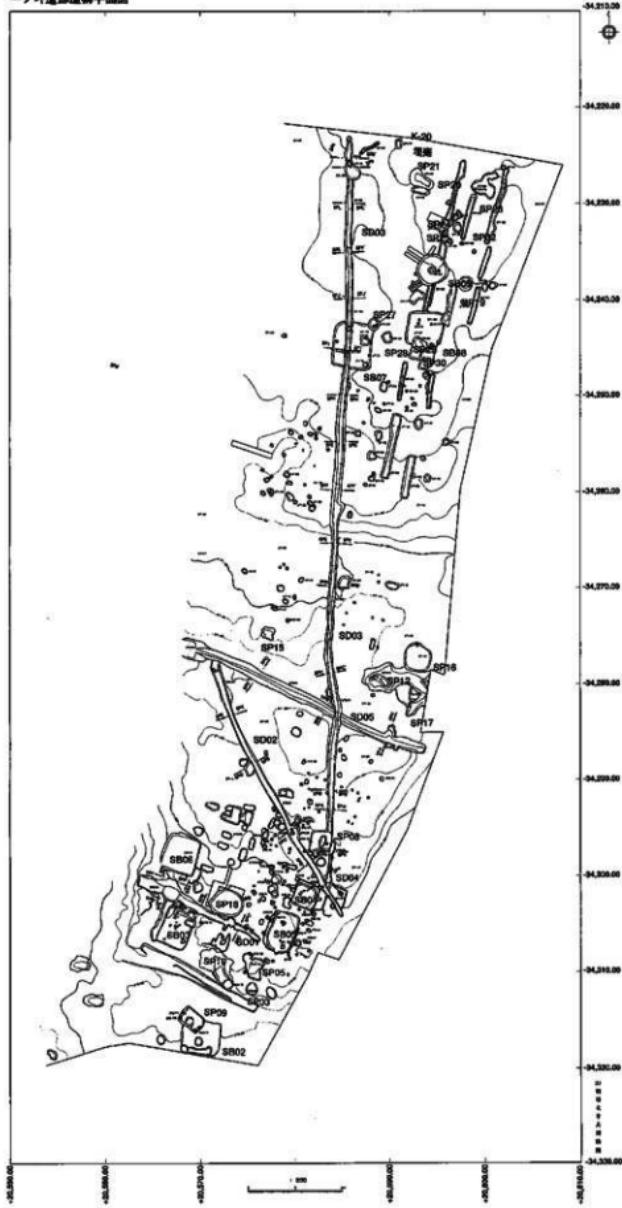
27号土坑関連試料および縄文時代前期埋甕内土の
リン分析結果

試 料 名	リン酸含量 P2O5mg/g	土 色	土 性
27号土坑覆土	1.27	10YR 2 / 2 黒褐	L
対比試料1	0.73	10YR 3 / 4 單褐色	L
対比試料2	0.70	10YR 3 / 4 單褐色	L
対比試料3	0.84	10YR 3 / 3 單褐色	L
対比試料4	0.61	10YR 3 / 3 單褐色	L
対比試料5	0.92	10YR 3 / 2 黒褐	L
縄文時代前期埋甕内土	0.90	10YR 3 / 3 單褐色	L

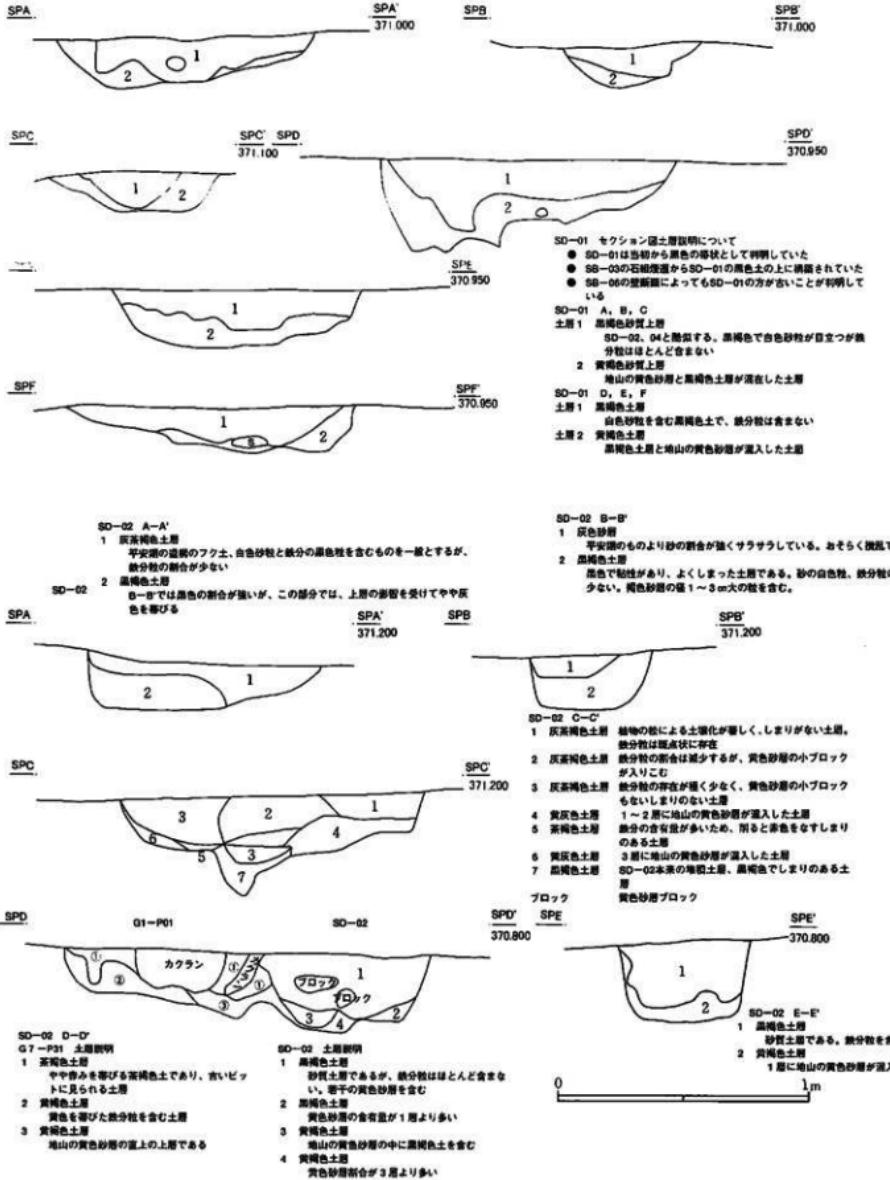
注 (1) 土色: マンセル表色系に準じた新版標準土色貼(農林省農林水産技術会議事務局監修, 1987)による。

(2) 土性: 土壤調査ハンドブック(ペドロジスト懇談会編, 1984)の野外土性的判定法による。
L...壤土(砂と粘土を半々に感じる。)

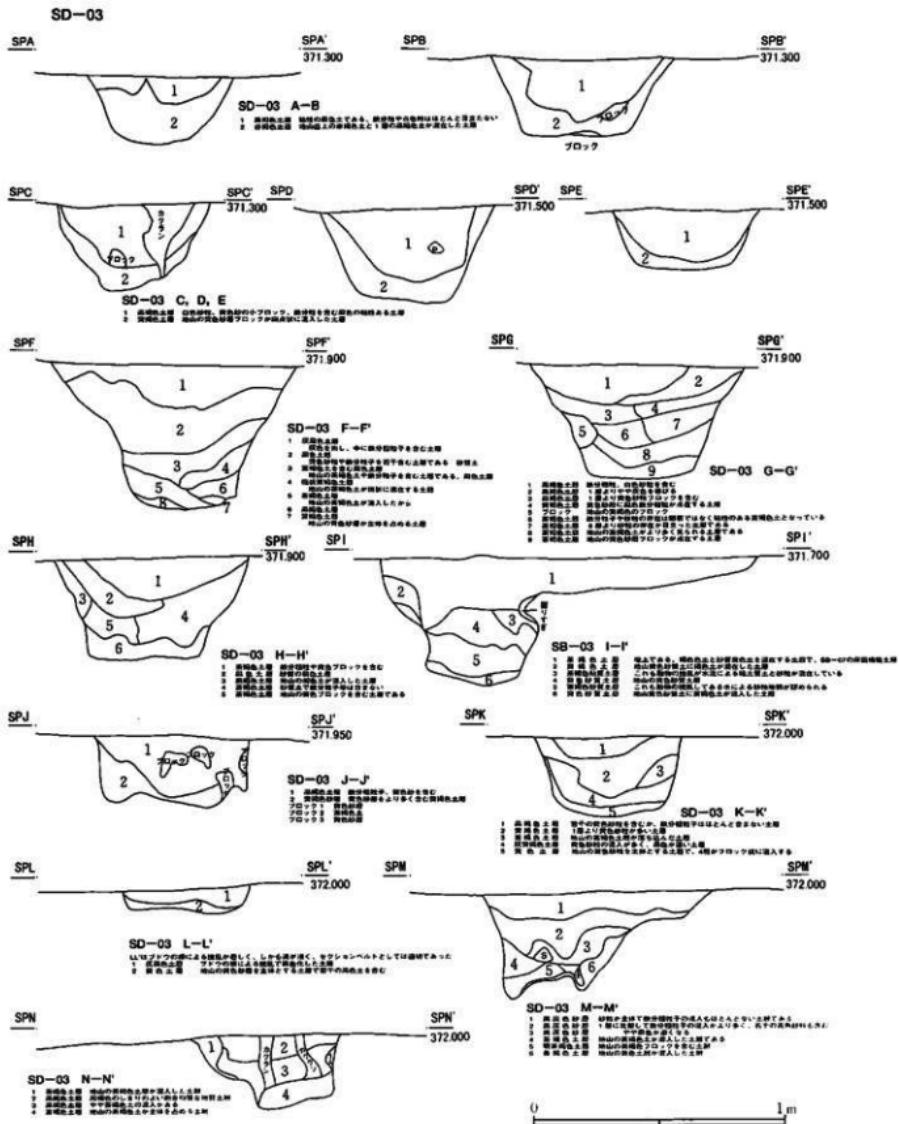
一ノ平造脚造機平面圖



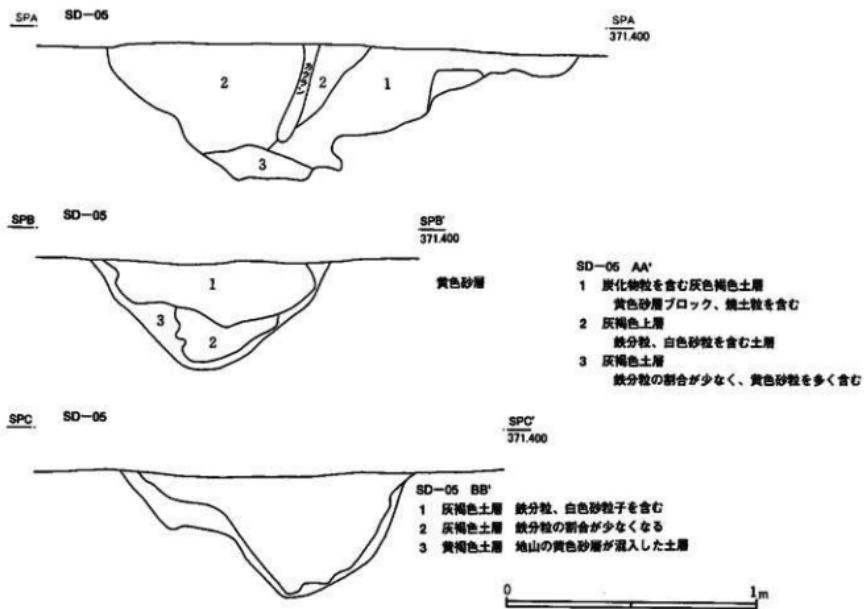
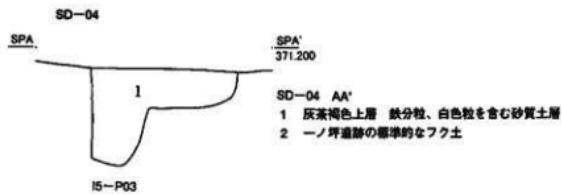
第2図 一ノ坪遺跡全体図



第3図 SD01・02セクション図

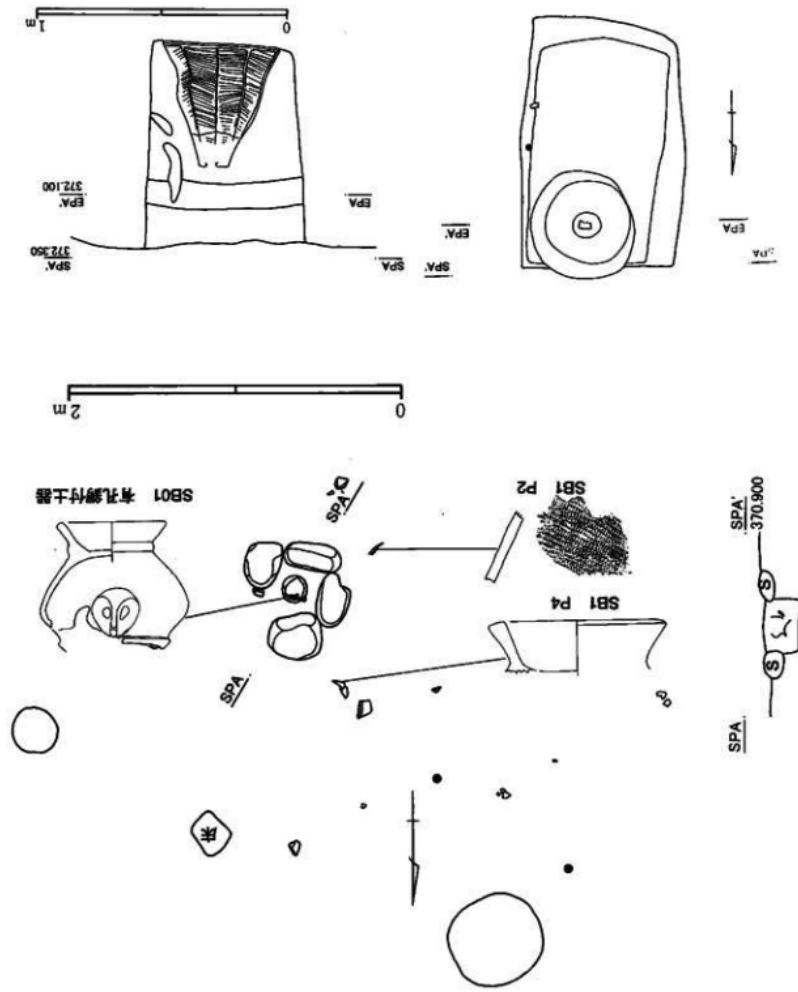


第4図 SD03セクション図

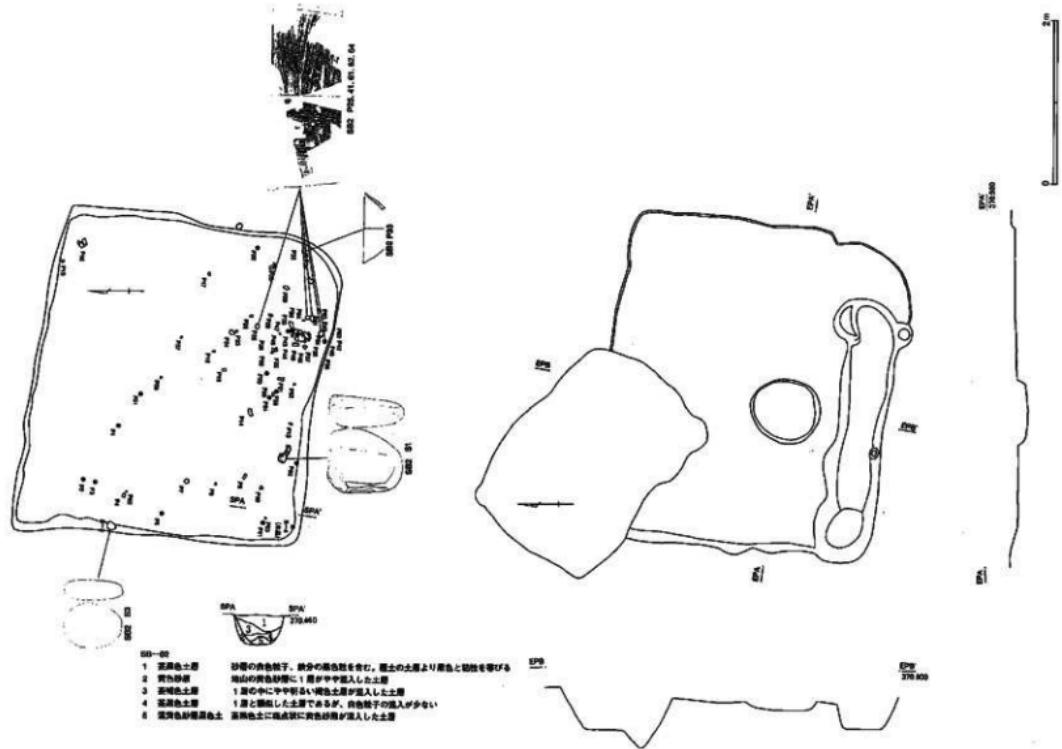


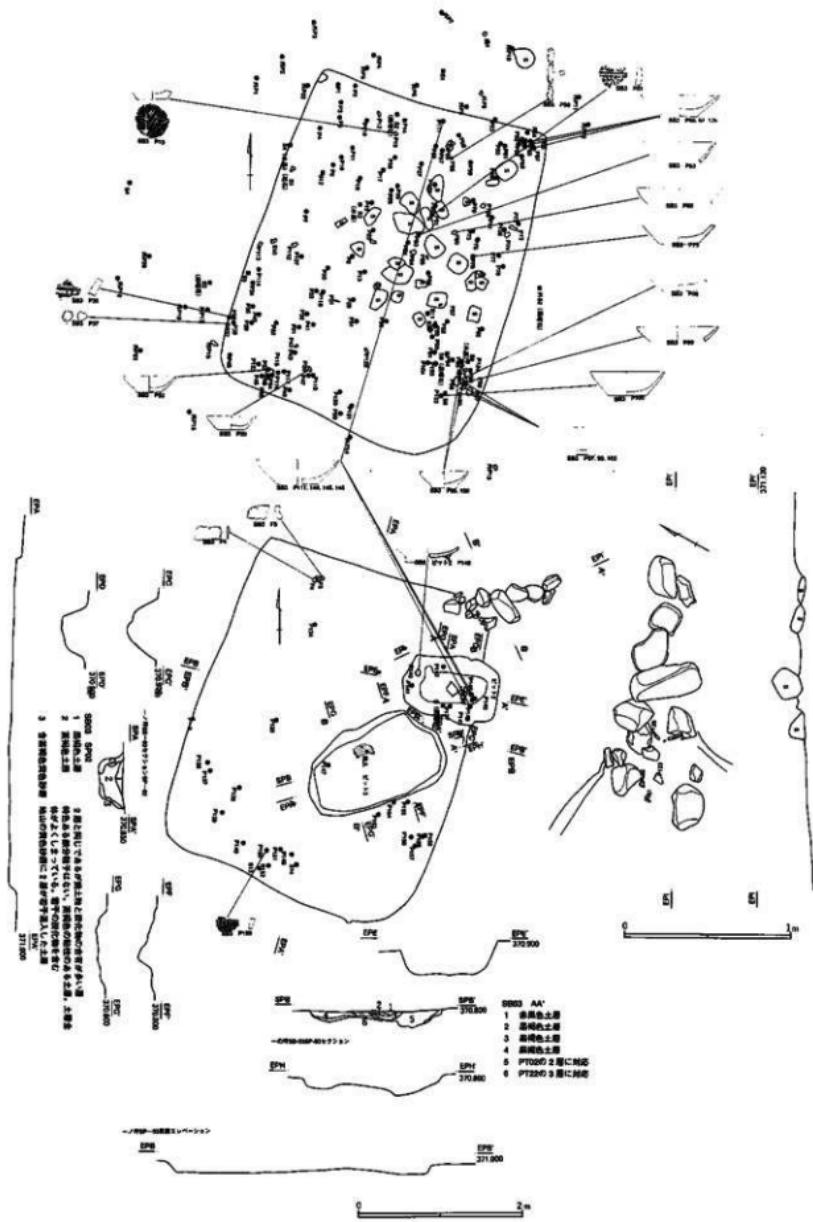
第5図 SD04・05セクション図

第6图 SB01·K-20号墓出土器物实测图

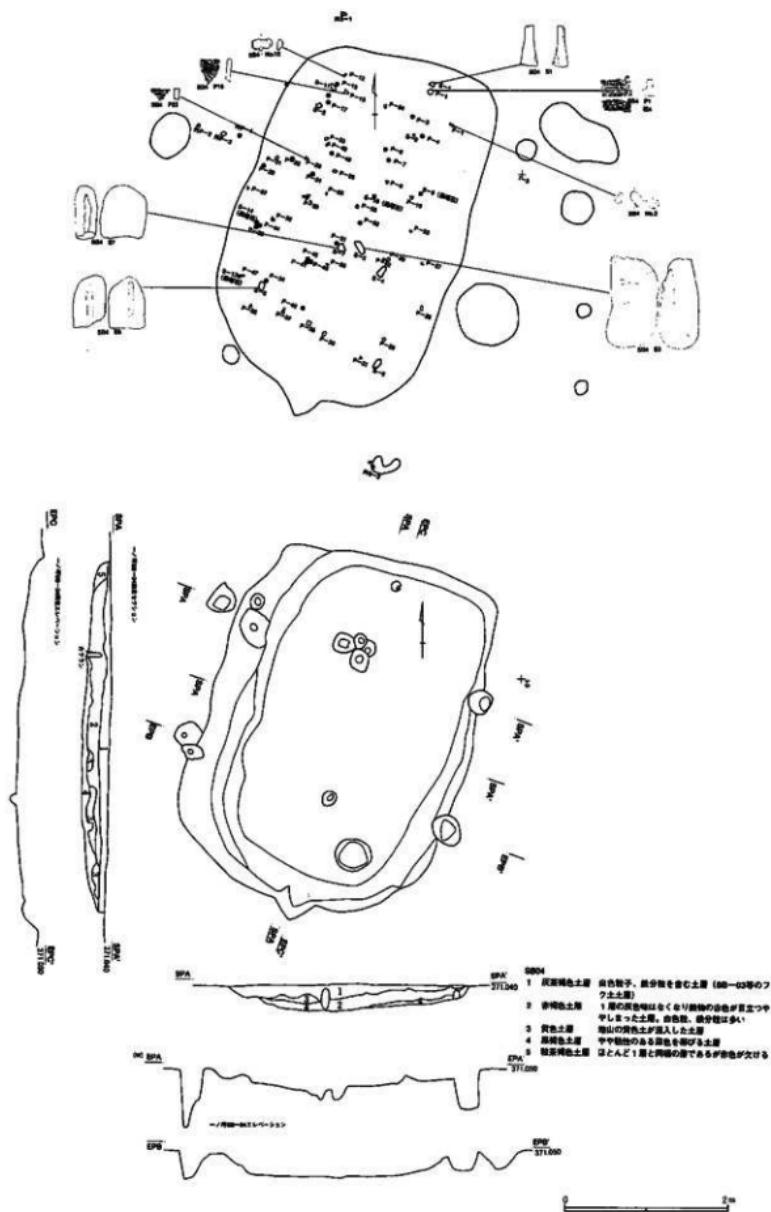


第7図 SB02実測図

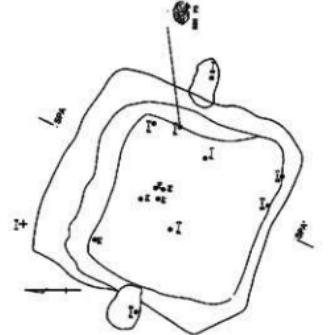




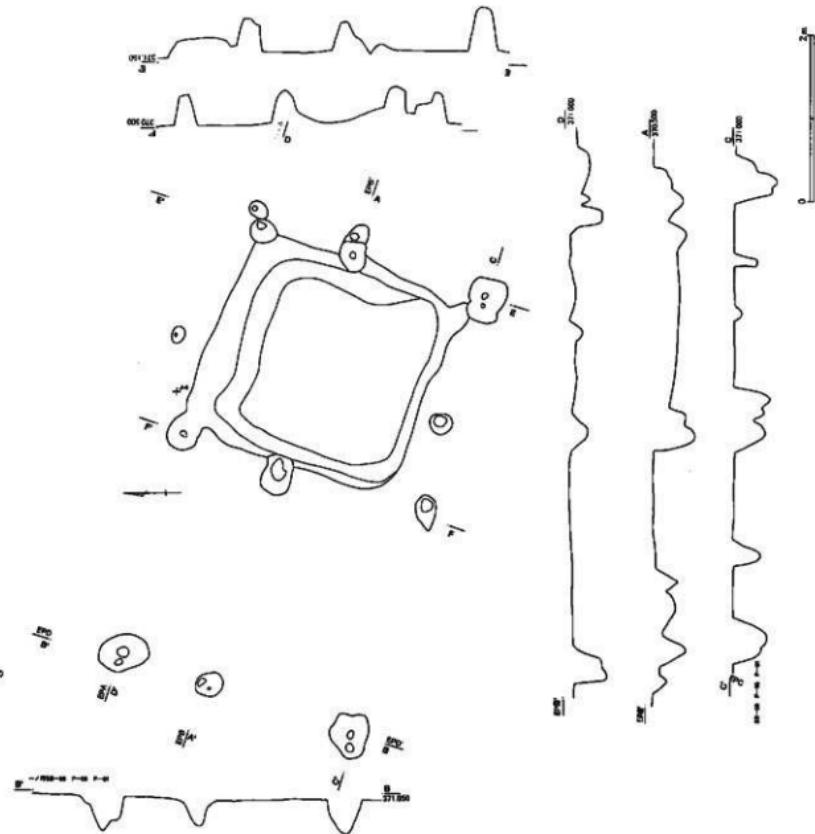
第8図 SB03実測図



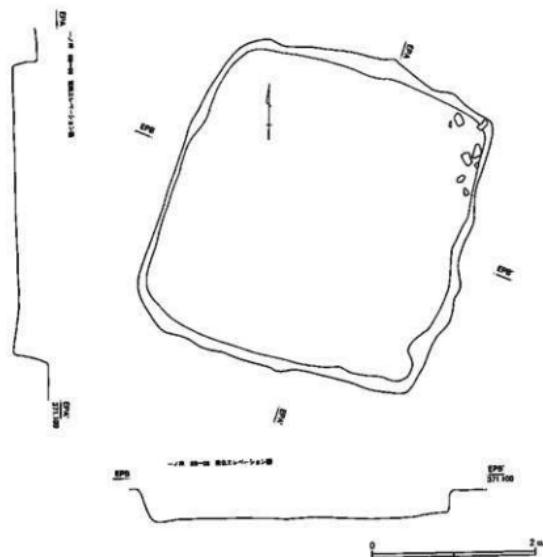
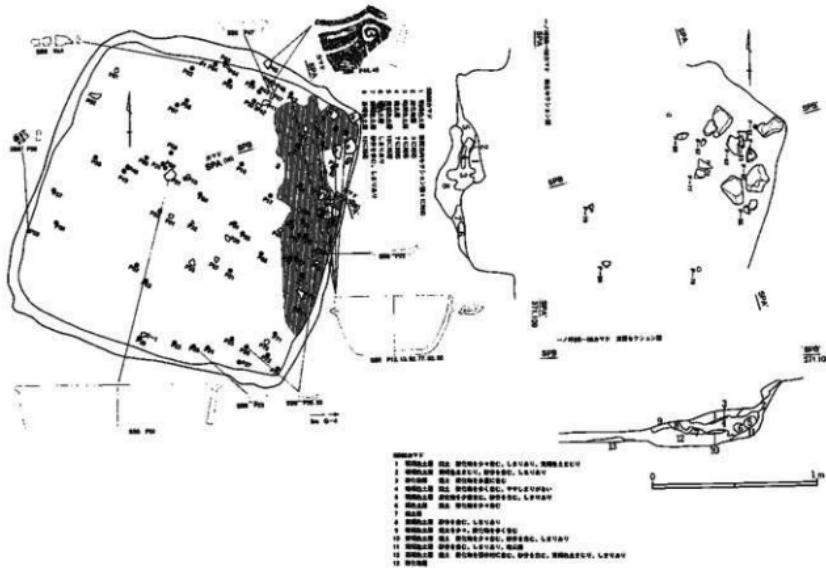
第9図 SB04実測図



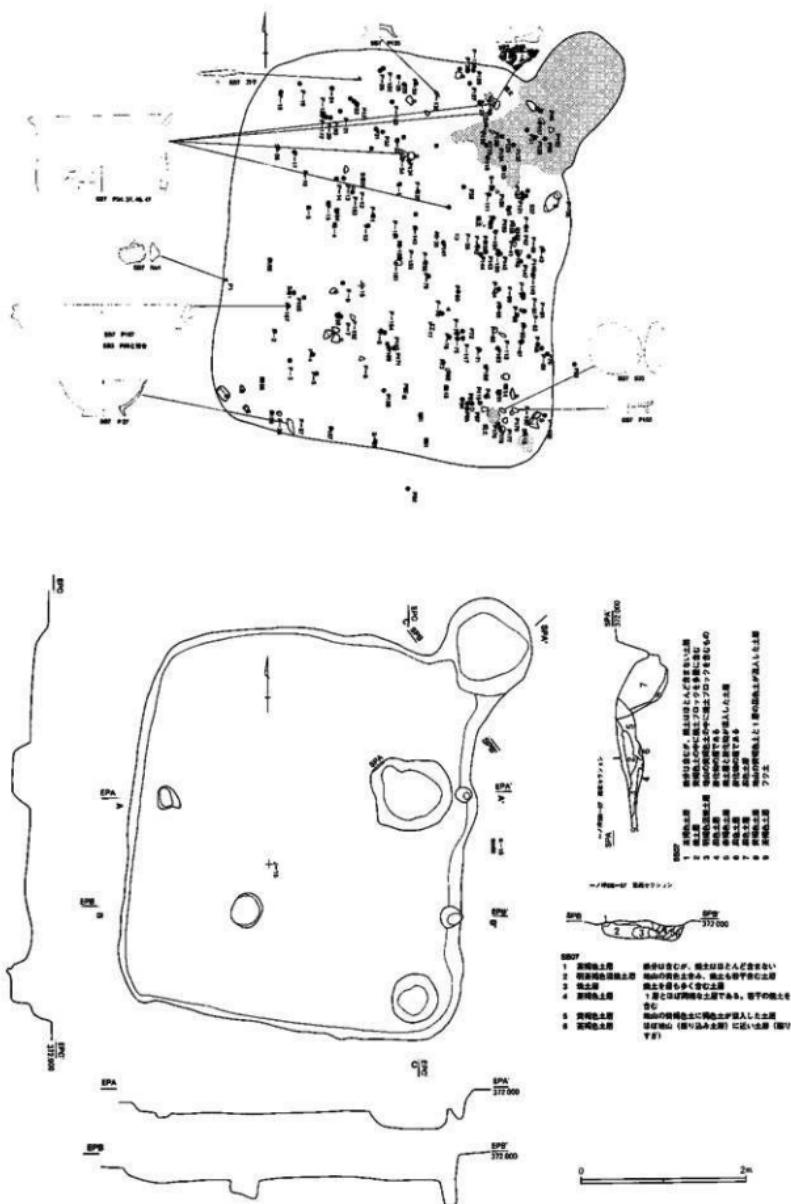
SB05
1 黄褐色土層 SB0-02, 03年に見られるフク土である。この場合は部分の
2 深褐色砂褐色土層 砂山の黄色が砂が混入した土層である
3 黄色土層 黄色でさや植物の根と土層で固めの砂を含む
4 黄褐色土層 1層と2層の間じつた土層である
5 黄褐色砂褐色土層 1層と2層の間じつた土層でさや植物の根を含む



第10図 SB05実測図

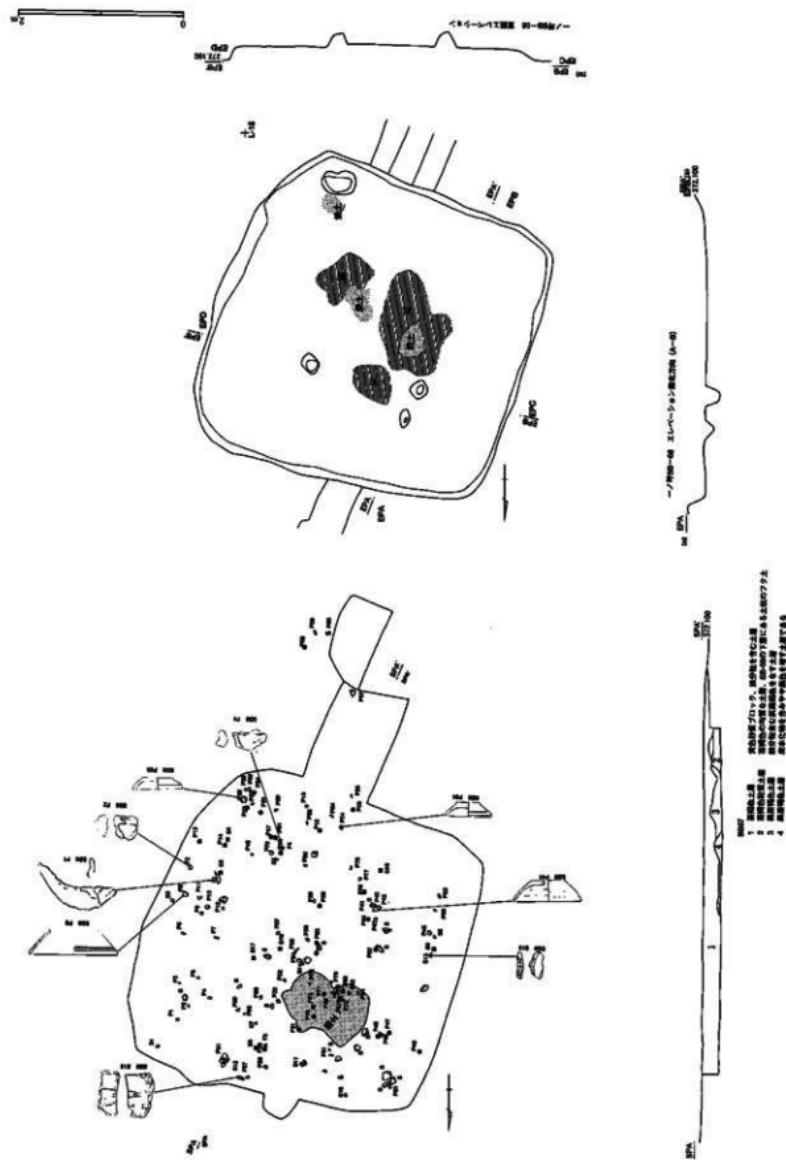


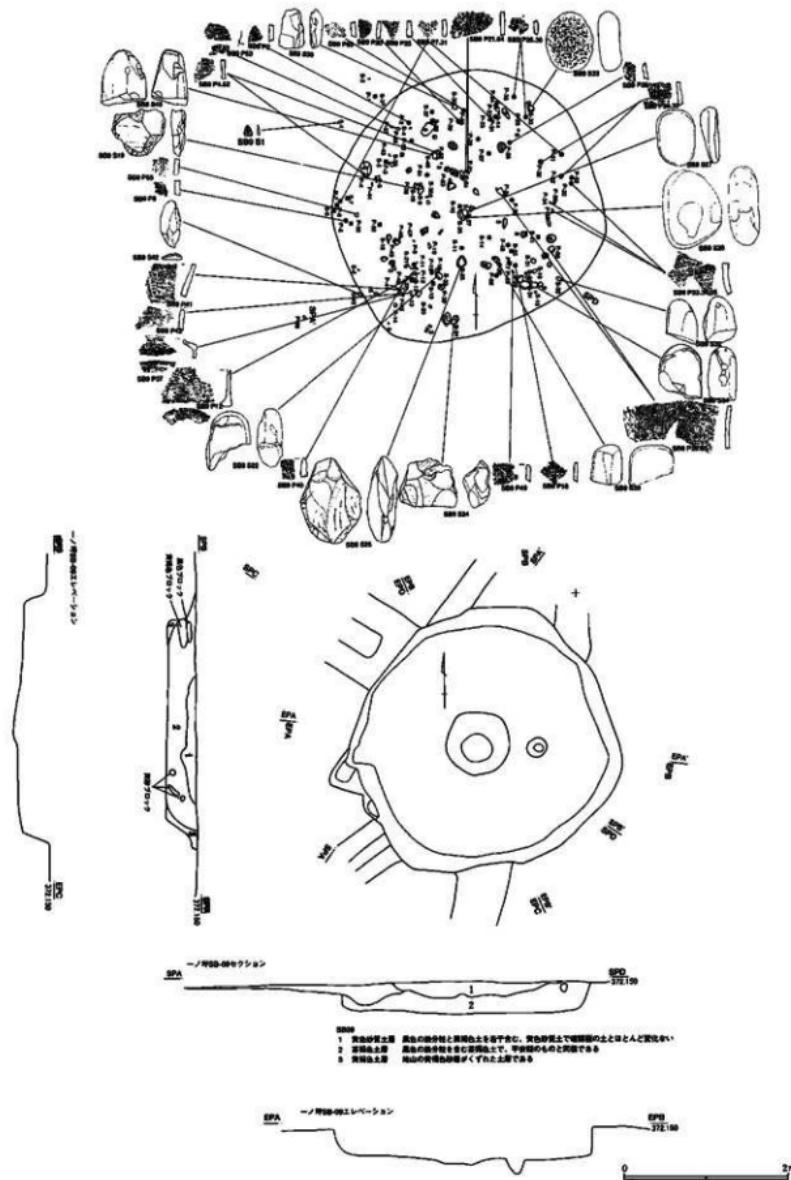
第11図 SB06実測図



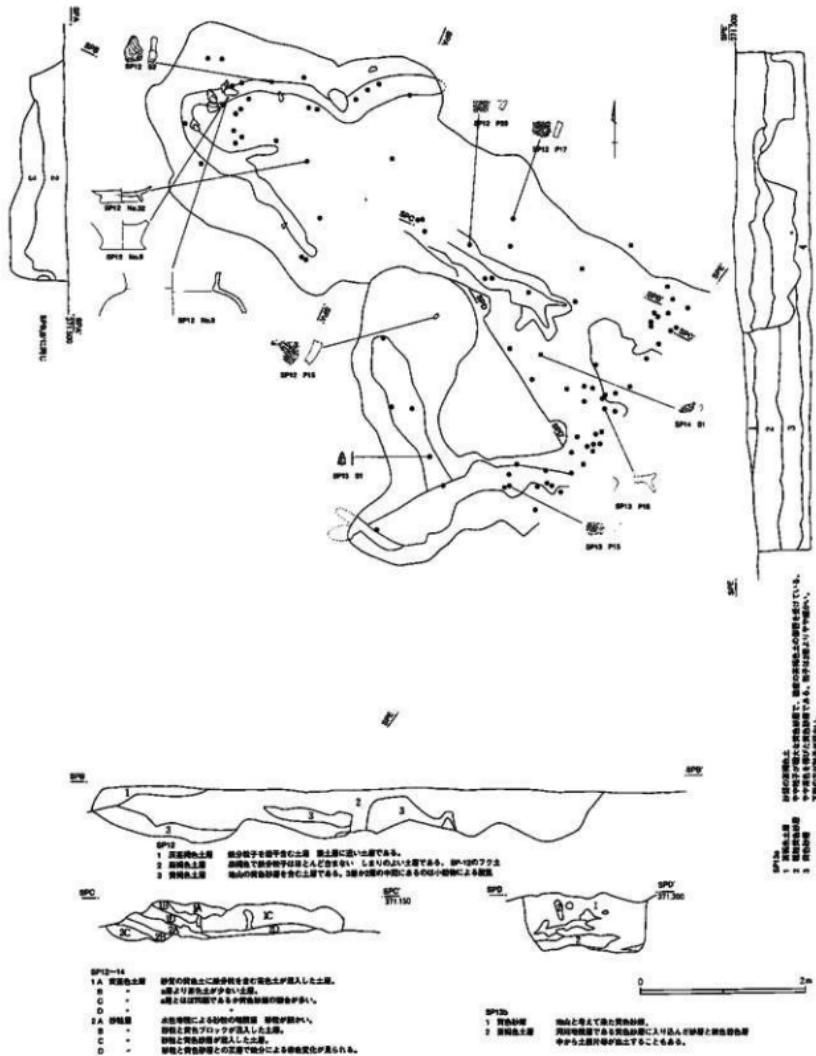
第12図 SB07実測図

第13圖 SB08實驗

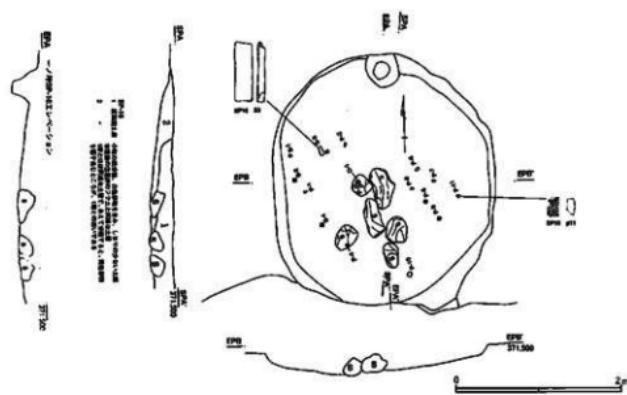




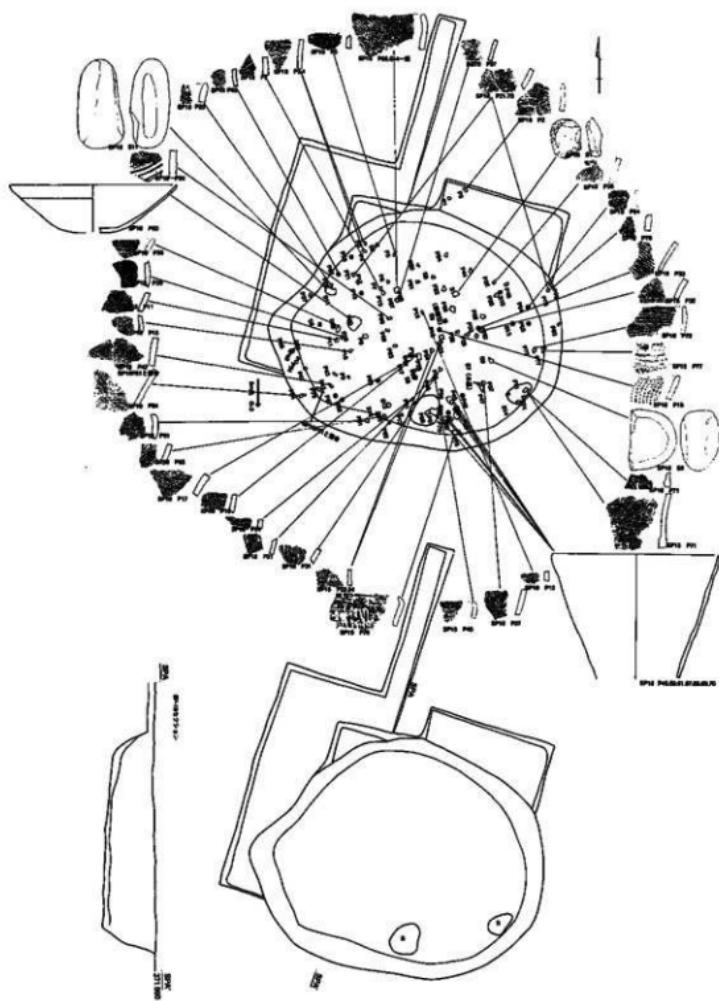
第14図 SB09実測図



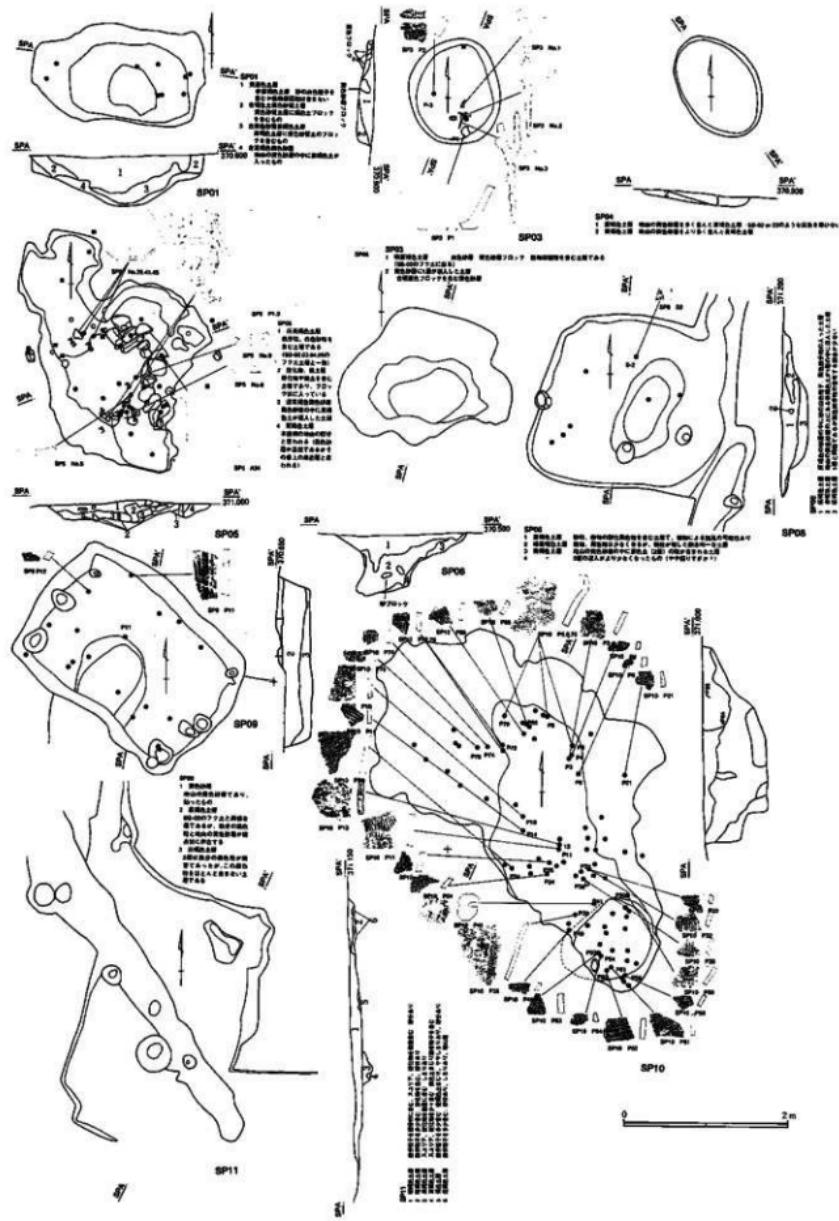
第15図 SP12実測図



第16図 SP16実測図



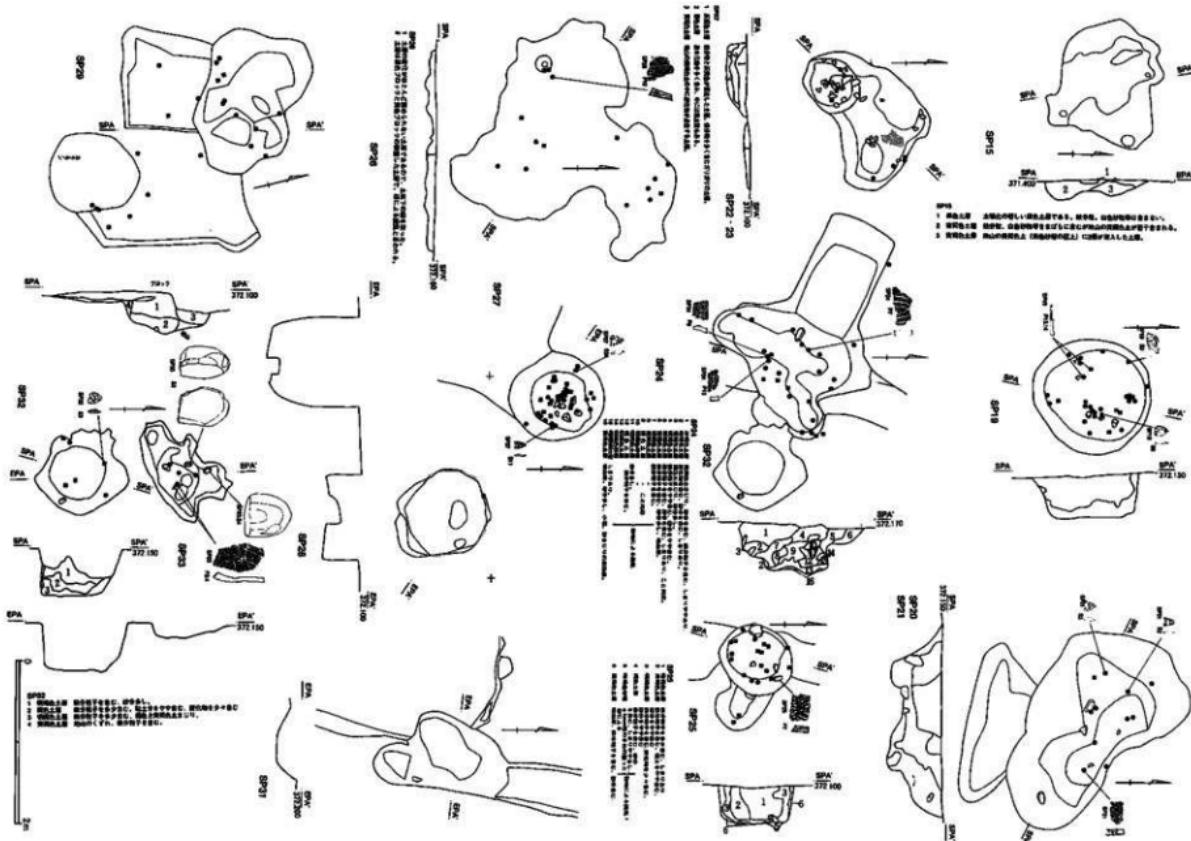
第17図 SP18実測図

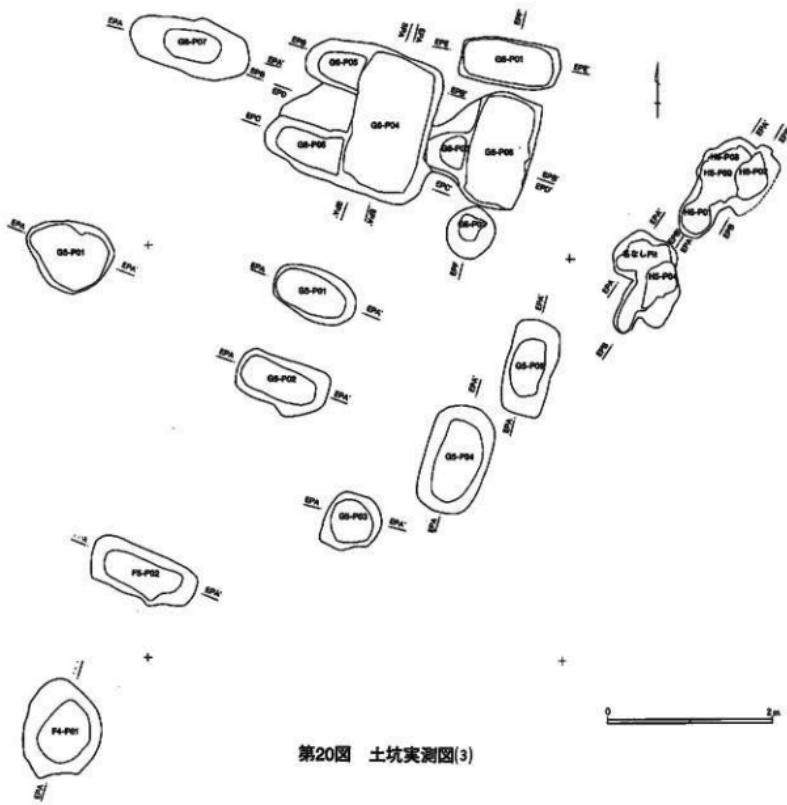


第18図 土坑実測図(1)

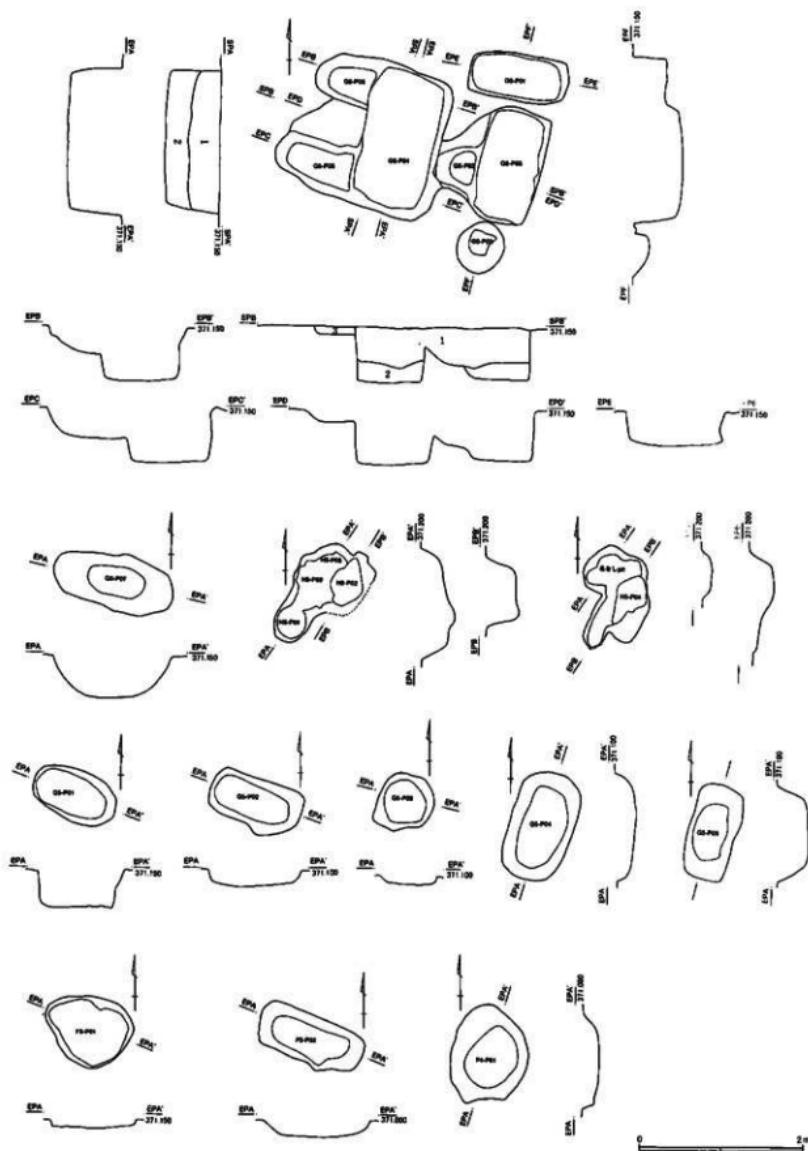
第19圖 土坑墓圖(2)

— 4 —

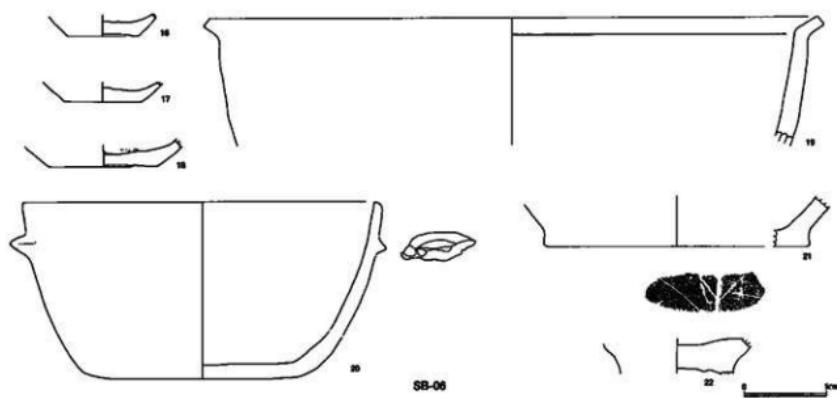
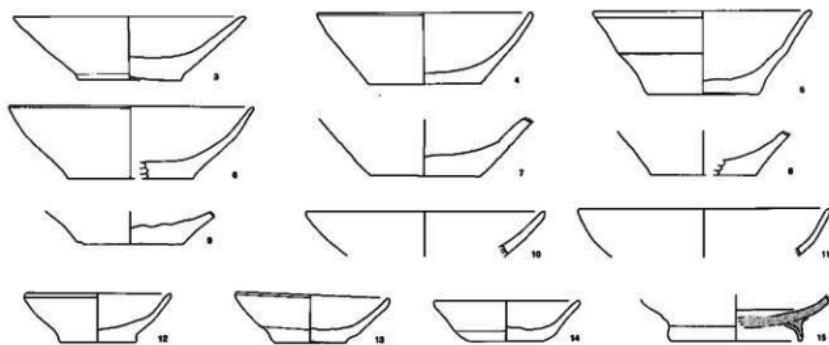
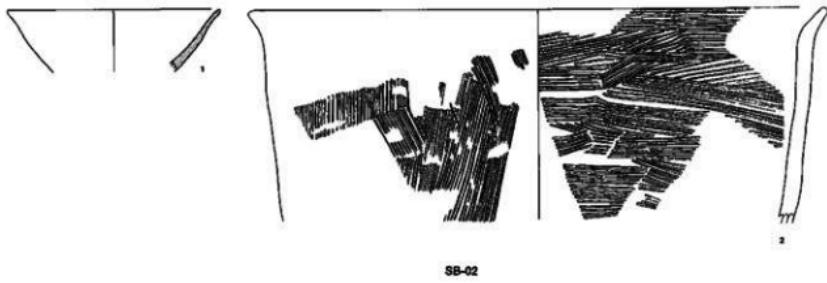




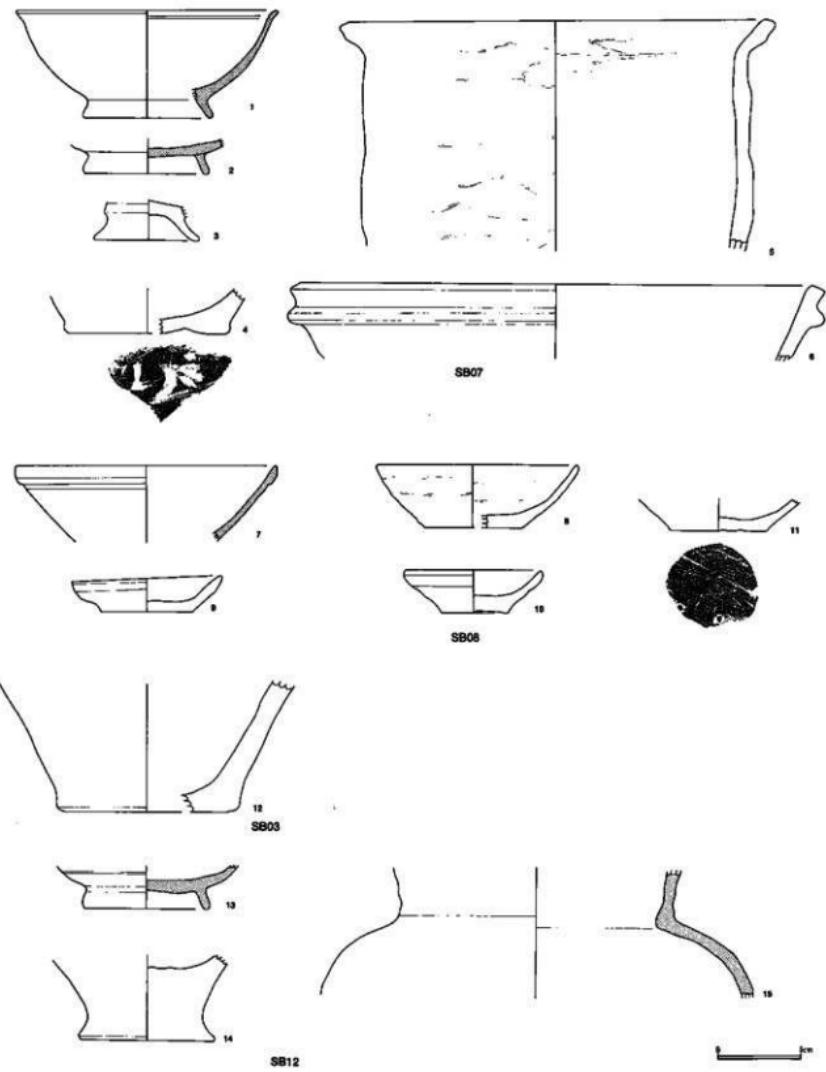
第20図 土坑実測図(3)



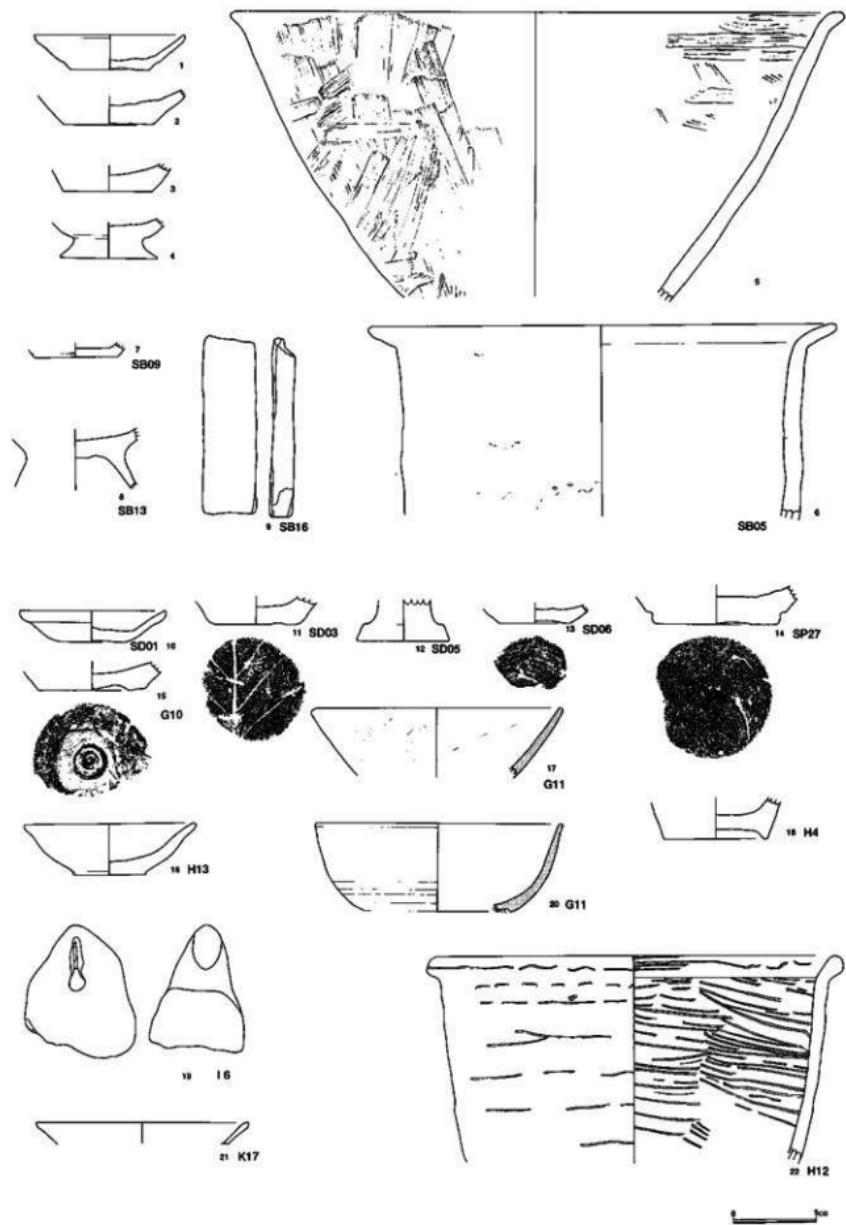
第21図 土坑実測図(4)



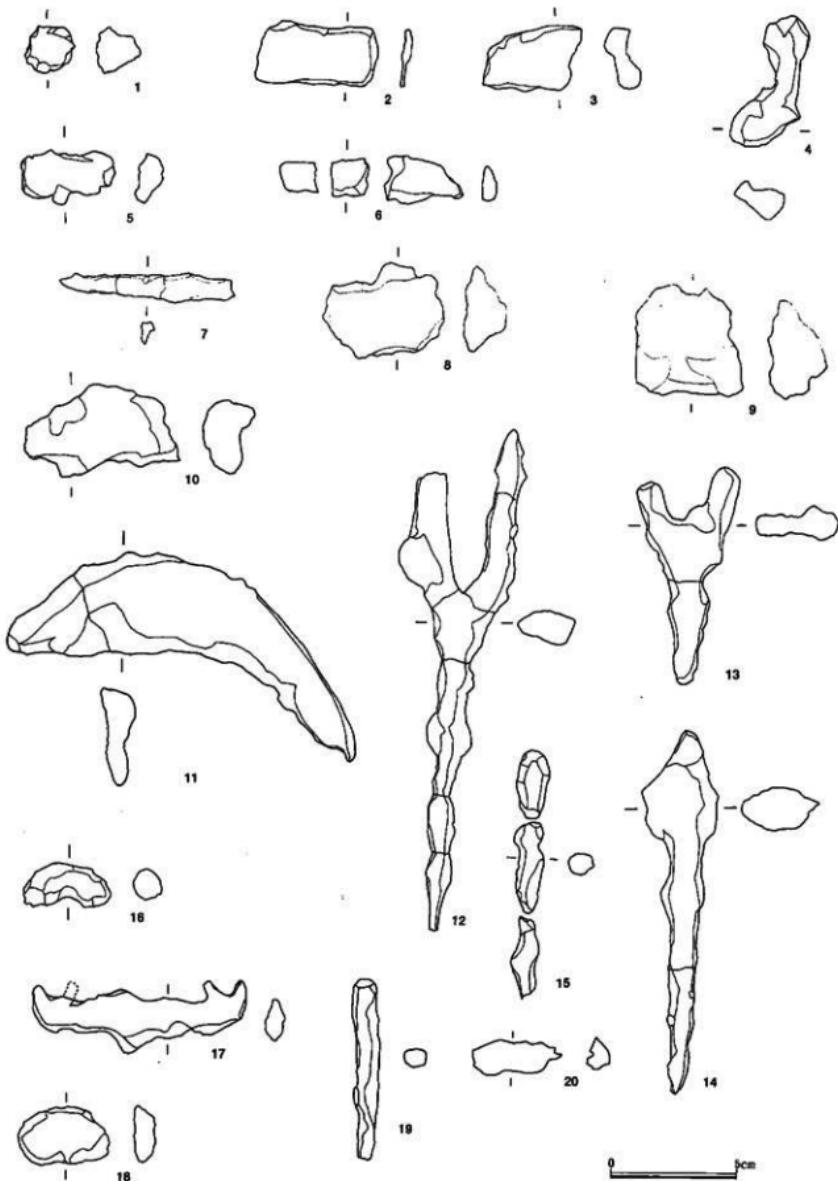
第22図 歴史時代出土遺物実測図(1)



第23図 歴史時代出土遺物実測図(2)



第24図 歴史時代出土遺物実測図(3)

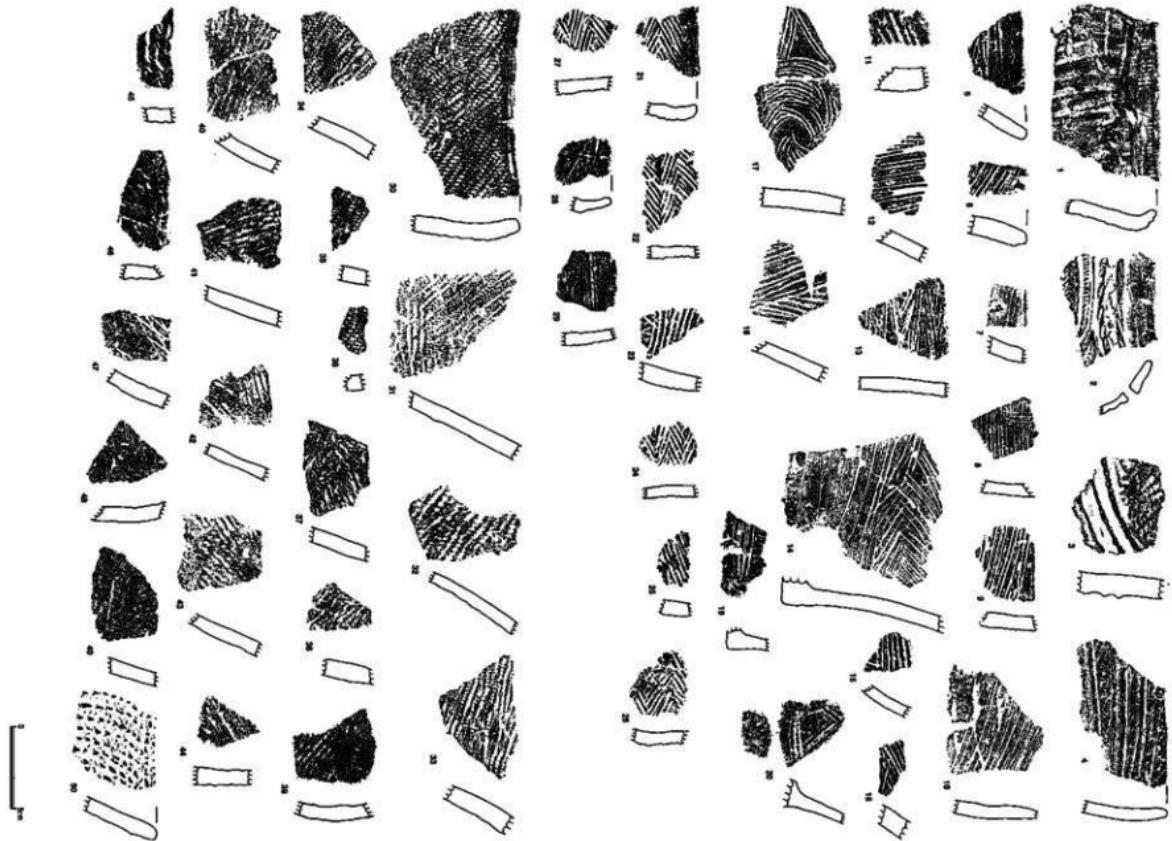


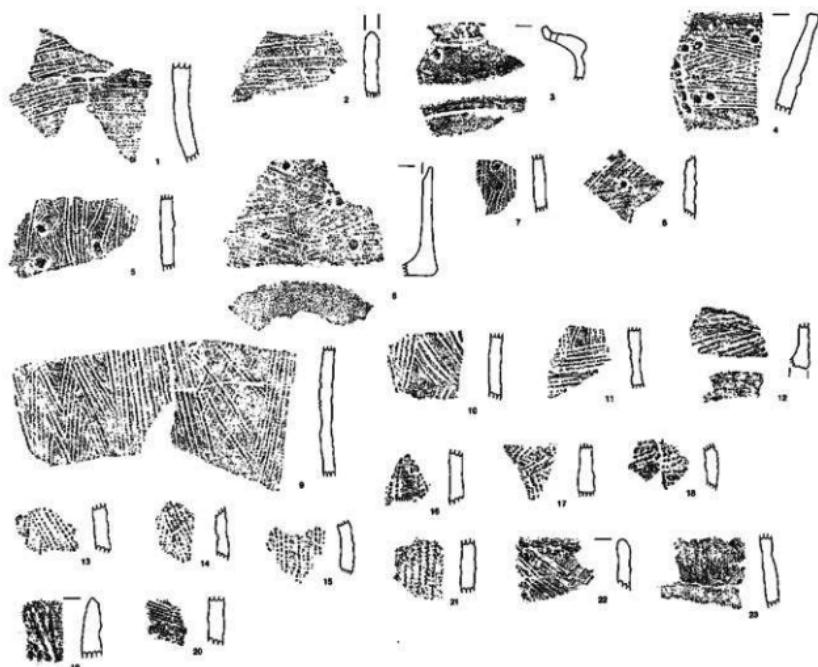
第25図 鉄製品実測図



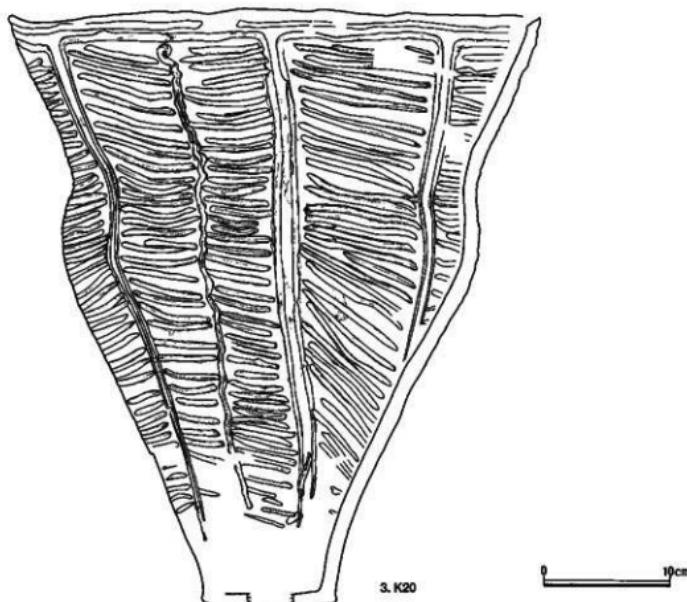
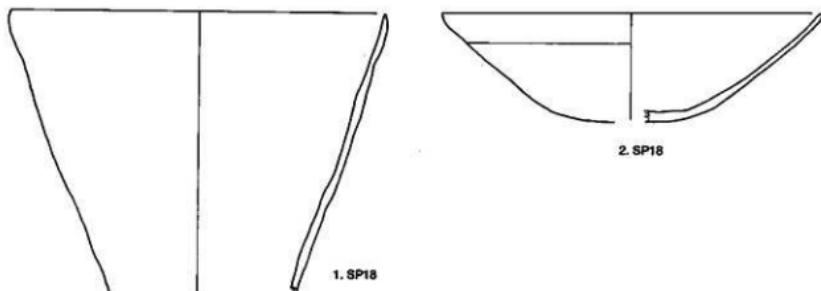
第26図 縄文時代土器拓本図(1)

第27図 繩文時代土器拓本図(2)

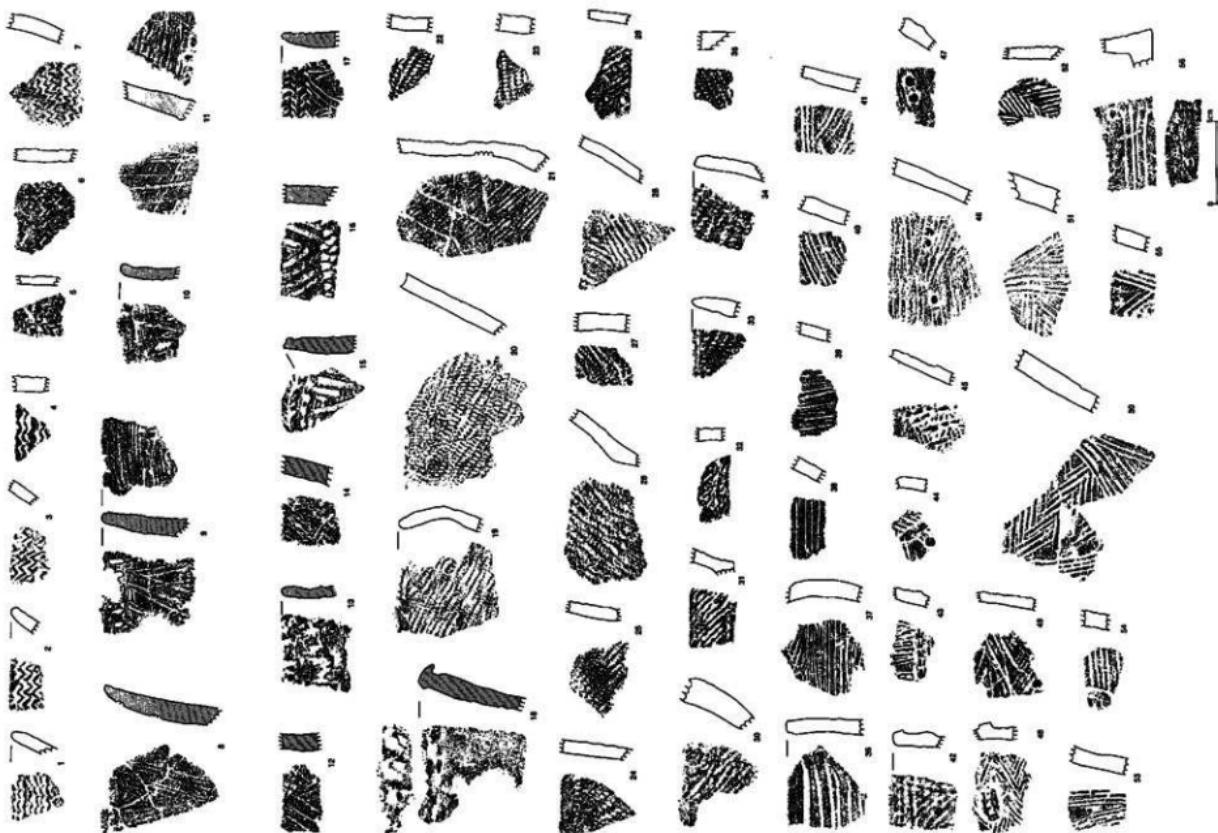




第28図 縄文時代土器拓本図(3)



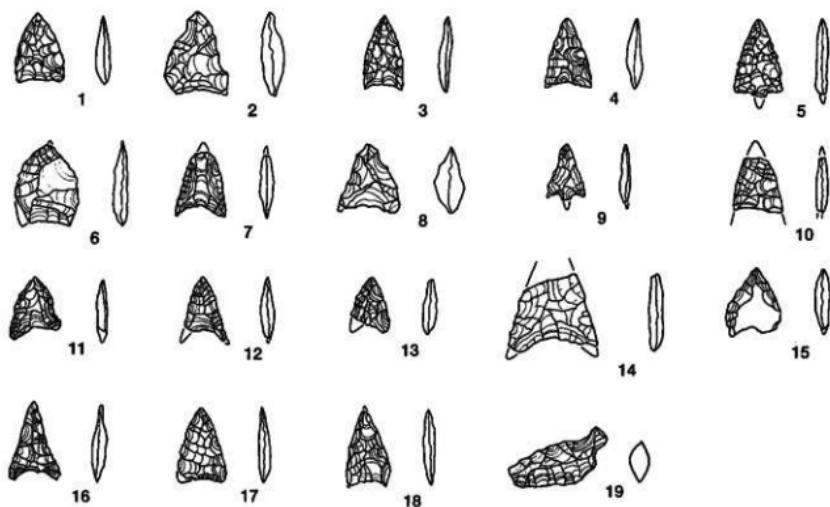
第29図 縄文時代土器実測図



第30圖 條文時代土器拓本圖(4)

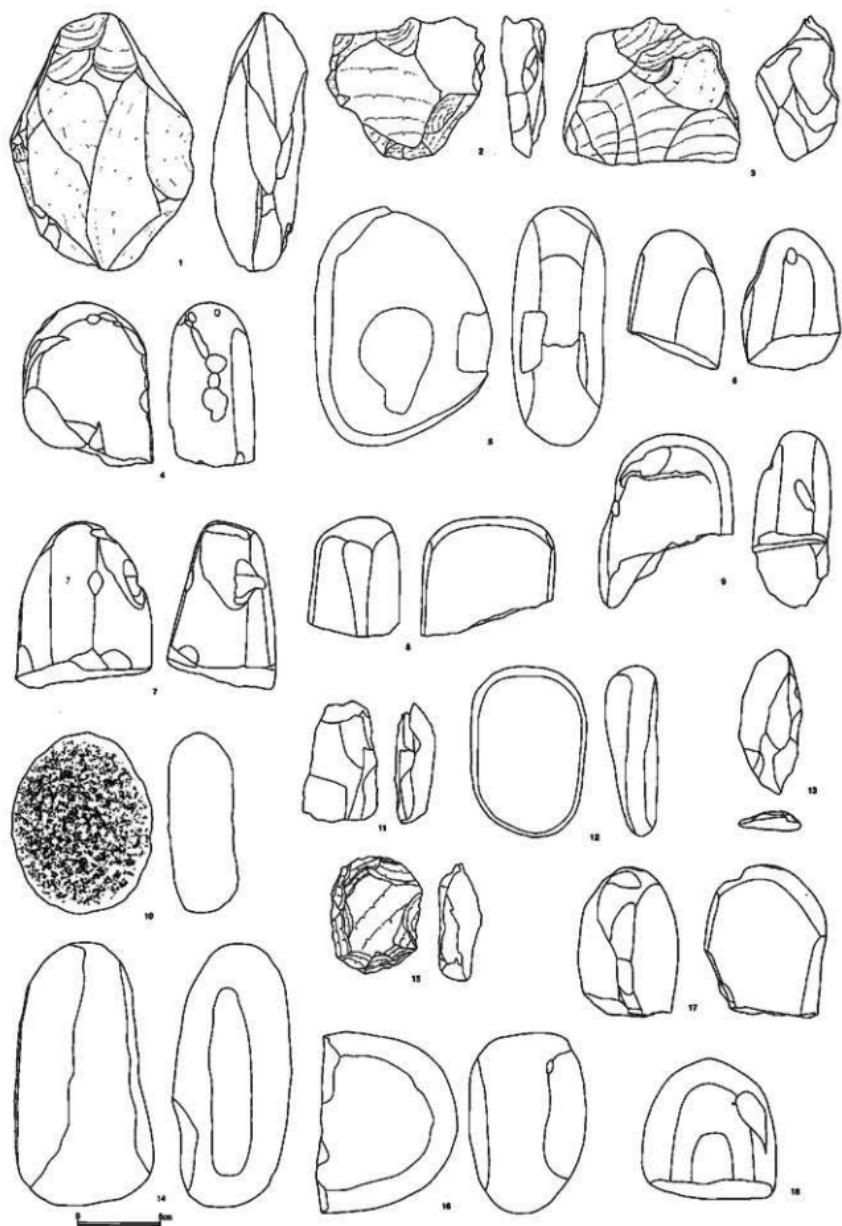


1 cm



0 5 cm

第31図 縄文時代土器拓本図(5) 石器実測図(1)



第32図 石器実測図(2)



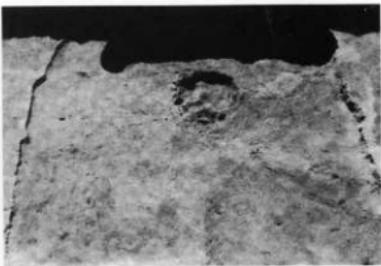
第33図 石器実測図(3)

図版 1 一ノ坪遺跡全体空中写真

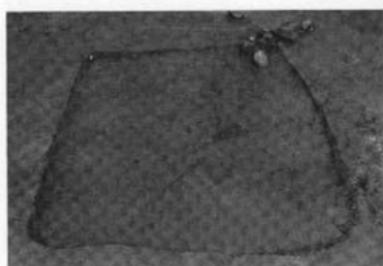




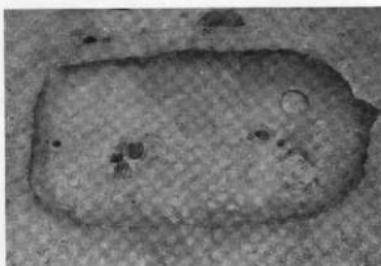
SB01



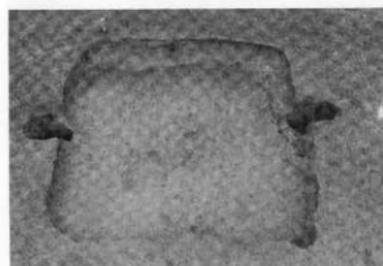
SB02



SB03



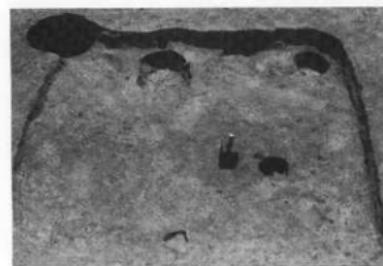
SB04



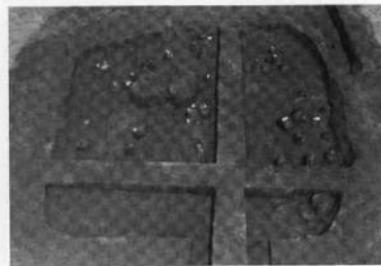
SB05



SB06



SB07



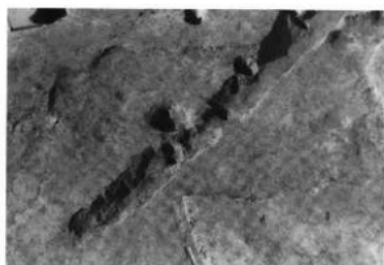
SB08



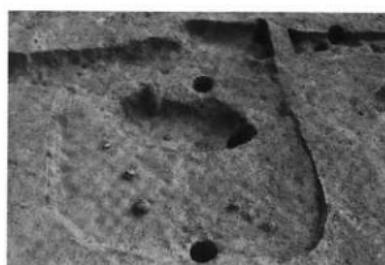
SP03



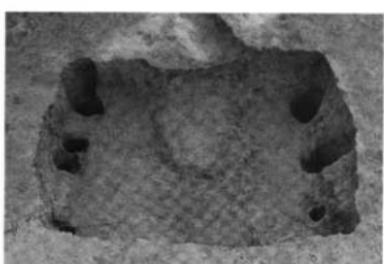
SP05



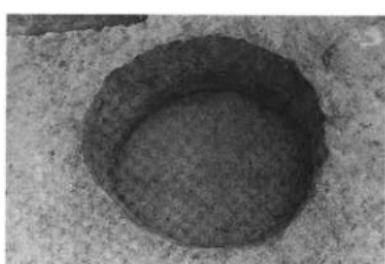
SP07



SP08



SP09



SP11

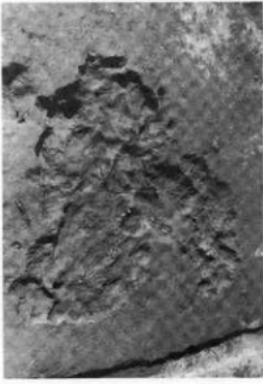
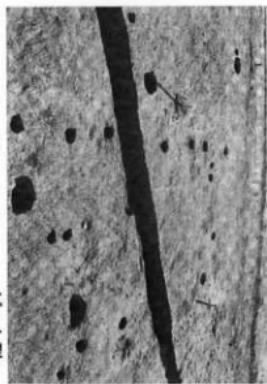
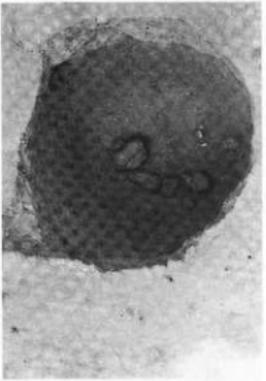
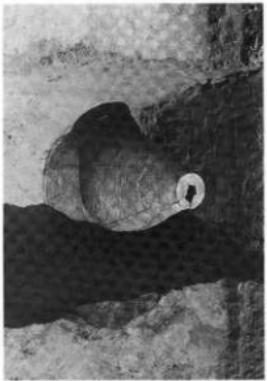
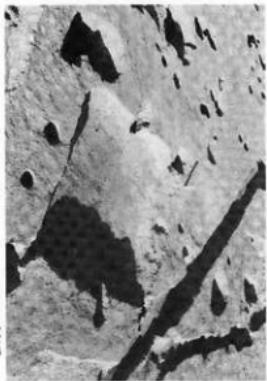


SP12

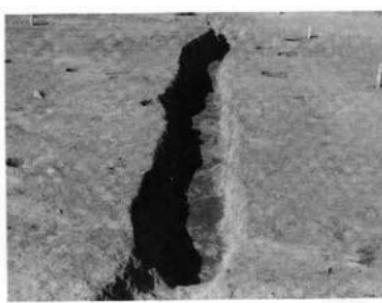
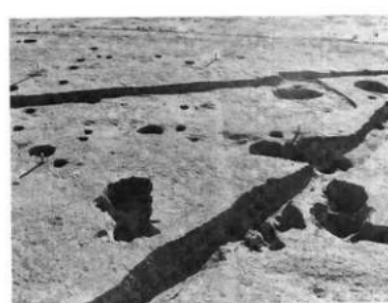


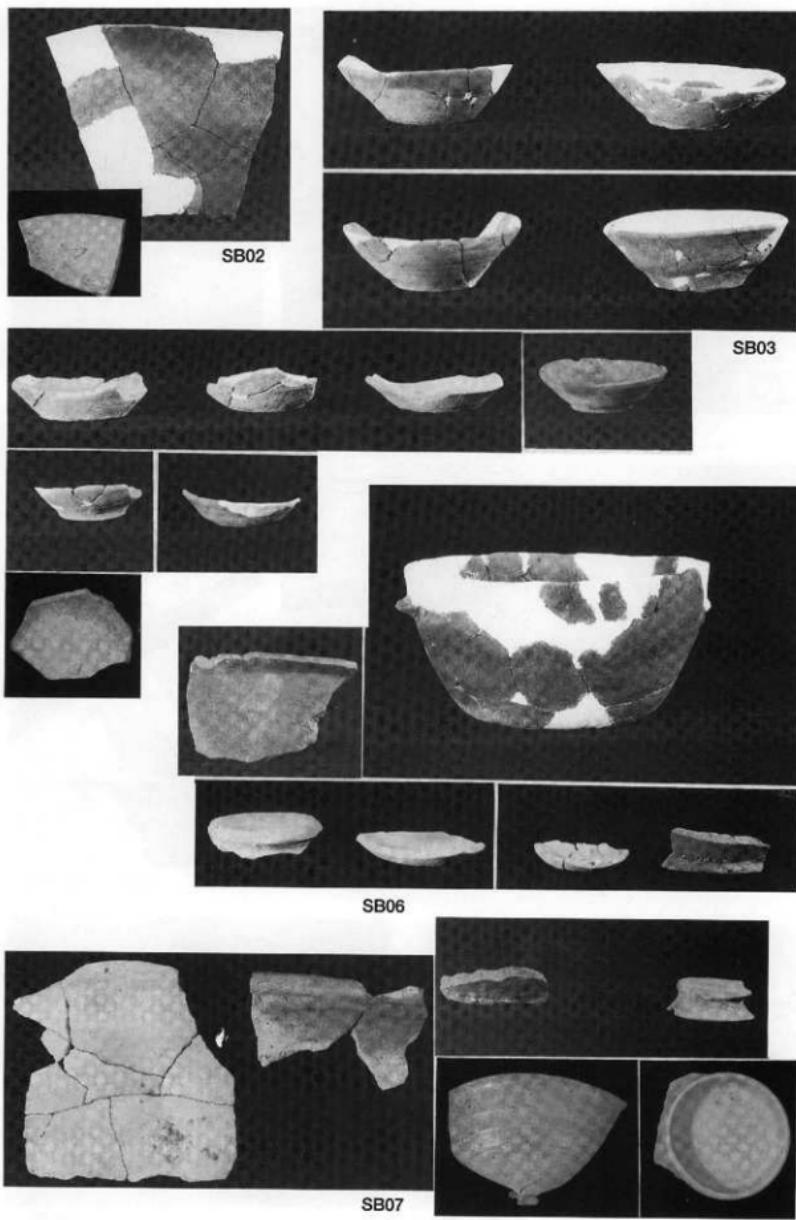
SP16

土 坑

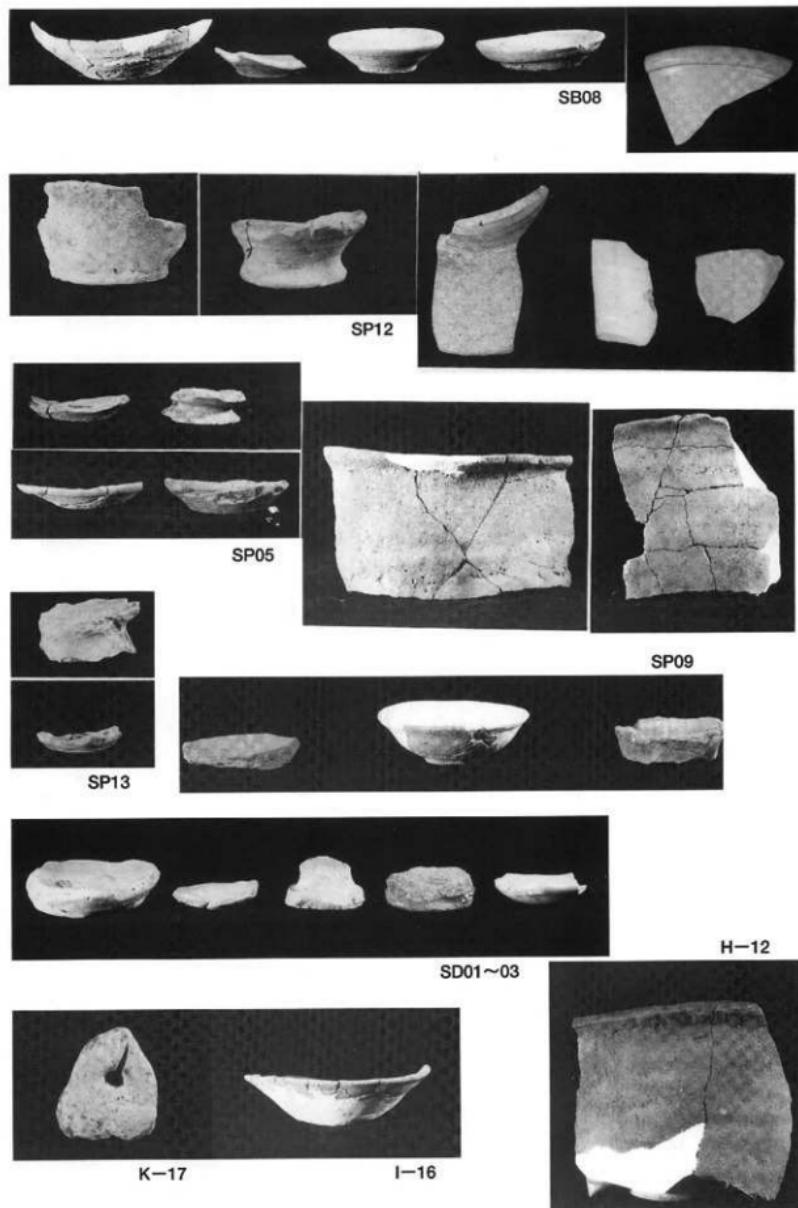


土坑

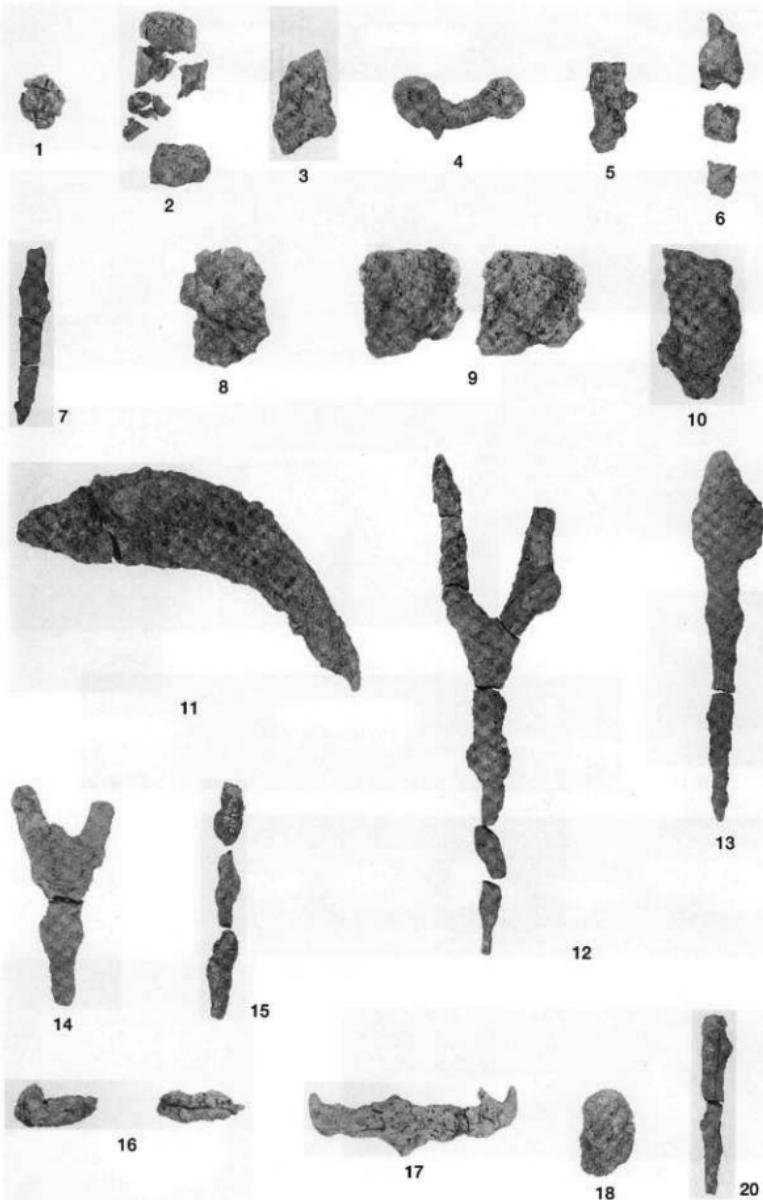




出土遺物、土師器、灰釉陶器、白磁



出土遺物、土師器、灰釉陶器、白磁



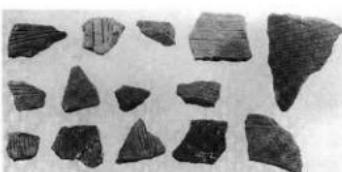
鉄 製 品



SB01



SP18



SP10



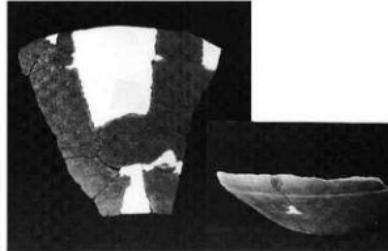
SP18



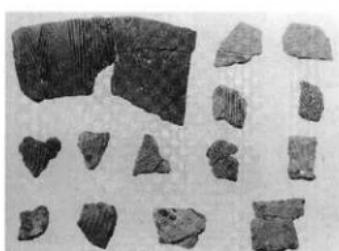
SP18



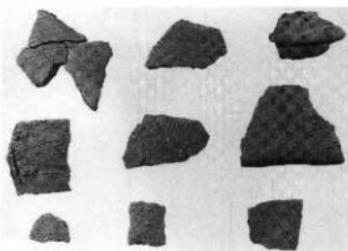
SP18



SP18



SB09

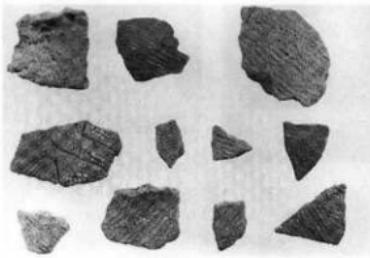


SP09

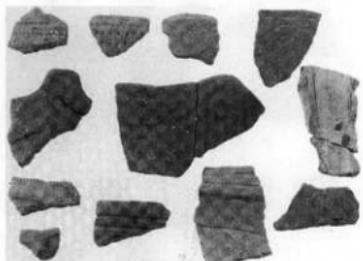
縄文土器



グリッド



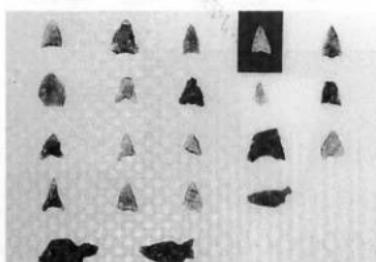
グリッド



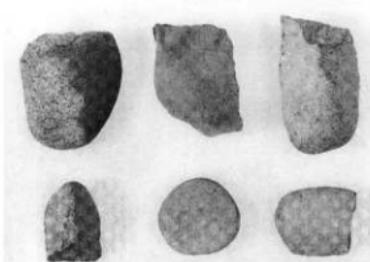
グリッド



グリッド



石鏃、石ヒ



石器類



K-21



石器類

報告書概要

フリガナ	イチノツボイセキハックツチョウサホウコクショ					
書名	一ノ坪遺跡発掘調査報告書					
副題	県営塩山熊野団地に伴う発掘調査報告					
シリーズ	山梨県埋蔵文化財発掘調査報告書第114集					
著者名	小野正文・熊谷英二					
発行者	山梨県教育委員会					
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター					
住所	山梨県東八代郡中道町923番地	電話	0552-66-3881			
印刷所	株式会社 ヨネヤ					
発行日	1997年3月31日					
一ノ坪遺跡	所在地 1/2,500地図	山梨県塩山市熊野27ほか	位置	東経 143° 30' 48" 北緯 35° 41' 27"		
概要	主な時代	縄文時代前期・中期 平安時代末				
	主な遺構	縄文時代竪穴状遺構2基、平安時代住居址5軒、竪穴状遺構3基				
	主な遺物	縄文時代前期の土器、中期の底部穿孔埋甕 平安時代末の壺、甕、灰釉陶器				
	特殊遺物	平安時代の鉄簇3点、中国製白磁1点				
	調査期間	1985年10月23日から12月23日 1986年4月13日から5月28日				

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第114集

一ノ坪遺跡発掘調査報告書
県営塩山熊野団地建設に伴う発掘調査報告

印刷日 1997年2月22日
 発行日 1997年3月31日
 編集 山梨県埋蔵文化財センター
 発行 山梨県教育委員会
 印刷 株式会社 ヨネヤ

